新潟県埋蔵文化財発掘調査報告書第18

長岡ニュータウン遺跡発掘調査報告書

〔Ⅲ〕

観音山遺跡
寺屋敷遺跡
蛇山10号塚
中山1号塚
中山2号塚

1979

新潟県教育委員会

長岡ニュータウン遺跡発掘調査報告書

〔Ⅲ〕

観音山遺跡
寺屋敷遺跡
蛇山10号塚
中山1号塚
中山2号塚

1979

新潟県教育委員会

序

昭和49年，長岡市による「長岡ニュータウン」基本構想の発表以来，本年度で五カ年を経過しています。このニュータウン建設に係わる土地利用の基本方針として，自然環境との調和・文化財の保護・周辺地域との関連等に十分配慮することがあげられています。

新潟県教育委員会は，この基本方針に沿って，ニュータウン建設区域内の埋蔵文化財の保護をはかるために，昭和51年度に遺跡分布調査を，昭和52年度には遺跡分布調査及び蛇山7号塚の発掘調査を実施し，いずれもその報告を公にしました。

昭和53年度に至っては，観音山遺跡・寺屋敷遺跡・蛇山10号塚・中山1号塚・中山2号塚の発掘調査を実施しました。本書はこれら5遺跡の調査報告書であります。

終りに，本調査に参加された調査員の方々はじめ，地元の方々，長岡市教育委員会また計画から実施に至るまで御配慮をいただいた地域振興整備公団に対し，深く謝意を表する次第であります。

昭和54年3月

新潟県教育委員会

教育長　米　山　市　郎

例　　言

1.　本書は地域振興整備公団から新潟県が委託を受け，新潟県教育委員会が昭和53年度に実施した観音山遺跡・寺屋敷遺跡・蛇山10号塚・中山１号塚・中山２号塚の発掘調査報告書である。

2.　遺跡の写真撮影・実測・遺物整理等の作業は，各発掘担当職員があたった。

3.　本書の執筆は，担当者を中心にして分担執筆をしたもので，文末に執筆担当者氏名を明記した。

4.　遺物の実測・拓本・写真撮影・図版の作成は関係する各項の執筆担当者を中心として，県教育庁文化行政課埋蔵文化財係職員があたった。

5.　長岡ニュータウン用地内に係る，地理的環境・歴史的環境についての全体的概要については既に，新潟県埋蔵文化財調査報告書第10「長岡ニュータウン遺跡分布調査報告書〔Ⅰ〕」1977年，同報告書第13「長岡ニュータウン遺跡調査報告書〔Ⅱ〕」蛇山７号塚・遺跡分布調査　1978年，長岡市教育委員会「長岡ニュータウン遺跡発掘調査報告書，中山５号塚・座禅塚　1978年等に詳述されているので，本報告書においては割愛した。

6.　調査にあたり，参加者各位並びに地元の人々のあたたかい御支援と御協力をいただいた。また地域振興整備公団長岡都市開発事務所・長岡市教育委員会から種々の御配慮をいただいたことを記して謝意を表する次第である。

7.　報告文中における諸氏名については，敬称を略させていただいた。

8.　発掘調査及び事前作業において次の二氏から御指導・御助言をいただいた。厚く御礼を申し上げる。

（敬称略）

小林達雄・寺崎裕助

目　　次

序　　説

発掘調査に至る経過…… 1

遺 跡 各 説

Ⅰ　観音山遺跡発掘調査報告

〔Ⅰ〕発掘調査の経過…… 3
〔Ⅱ〕遺 跡 の 立 地…… 5
〔Ⅲ〕グリッドの設定…… 5
〔Ⅳ〕層序と遺物の出土状況…… 5
〔Ⅴ〕遺　　物…… 8
〔Ⅵ〕ま　と　め…… 9

Ⅱ　寺屋敷遺跡発掘調査報告

〔Ⅰ〕発掘調査の経過……11
〔Ⅱ〕遺 跡 の 立 地……13
〔Ⅲ〕グリッドの設定と土層……13
〔Ⅳ〕調査の結果とまとめ……13
付編，炭焼窯について……15

Ⅲ　蛇山10号塚発掘調査報告

〔Ⅰ〕発掘調査の経過……17
〔Ⅱ〕蛇山10号塚の位置と現状……19
〔Ⅲ〕内　部　構　造……20
〔Ⅳ〕調査の結果とまとめ……22

Ⅳ　中山１号・２号塚発掘調査報告

〔Ⅰ〕中山１号・２号塚の位置と現状……23
〔Ⅱ〕発掘調査の経過……24
〔Ⅲ〕中山１号塚の調査……25
〔Ⅳ〕中山２号塚の調査……26
〔Ⅴ〕中山１号・２号塚のまとめ（構造・性格について）……27

図 版 目 次

図版第１図　観音山遺跡近景（北側から）・遺跡遠影（南側から）
図版第２図　発掘風景（南側から）・Ｅ―78グリッド南壁セクション
図版第３図　Ｊ―78グリッド南壁セクション・観音山遺跡出土遺物および表採資料
図版第４図　寺屋敷遺跡遠景（北側から）・同（西側から）
図版第５図　寺屋敷遺跡近景（北側から）・発掘風景
図版第６図　１号炭焼窯跡全景（西側から）・１号炭焼窯内土堆積状態（北側から）
図版第７図　２号炭焼窯跡全景（南側から）・同（東側から）・排煙口断面（東側から）・排煙口（南側から）
図版第８図　蛇山10号塚近景・蛇山10号塚東壁断面図（Ａ―Ｂ）
図版第９図　発掘状況遠景（東側から）・蛇山10号塚基底部（南側より）
図版第10図　中山１・２号塚位置（西方より）・中山１号塚現状（南方より）
図版第11図　中山１号塚Ｃ―Ｄ土層断面・１号塚土層断面
図版第12図　中山２号塚現状（西方より・北方より）
図版第13図　中山２号塚（Ａ―Ｂ土層断面・Ｃ―Ｄ土層断面）

挿 図 目 次

第１図　遺 跡 位 置 図…… 2
第２図　観音山遺跡地形図…… 4
第３図　観音山遺跡グリッド設定図…… 6
第４図　観音山遺跡土層柱状図…… 7
第５図　観音山遺跡土層断面図…… 8
第６図　観音山遺跡出土石器実測図…… 9
第７図　観音山遺跡出土縄文土器拓影…… 9
第８図　寺屋敷遺跡周辺の地形と遺跡の位置……12
第９図　寺屋敷遺跡地形図……14
第10図　寺屋敷遺跡グリッドの設定と土層……14
第11図　寺屋敷遺跡第１号炭焼窯跡実測図……16
第12図　寺屋敷遺跡第２号炭焼窯跡実測図……16
第13図　蛇山10号塚周辺地形図……18
第14図　蛇山10号塚平面実測図……19
第15図　蛇山10号塚断面図・火焚穴断面図・
　　塚基底部実測図……21
第16図　中山１・２号塚位置図……23
第17図　中山１号塚平面図・断面図……25
第18図　中山２号塚平面図・断面図……26

序　　説

発掘調査に至る経過

長岡ニュータウンの建設は，新しい総合的な機能をもつ地方都市建設と隣接地域をも含め開発整備するとともに，調和のとれた長岡市全体の発展を図ろうとする目的を持ったものである。地域整備公団の地方都市開発整備部門が最初に手掛ける事業として，その完成が期待され注目されているところである。

公団では事業の実施計画策定にあたり，自然環境との調和や文化財の保護及び周辺地域との関連に十分配慮するとの土地利用計画の基本方針を打ち出している（長岡ニュータウン開発整備に係る事業実施基本計画）。公団ではまず開発対象地域を設定し基礎資料を得るべく調査を開始し，そのうち動物・植生・文化財についての調査は昭和49年11月長岡市に依頼した。同年市はその報告を公団に行なったが埋蔵文化財については，調査期日の関係から現地踏査を欠いたものとなり，このため公団では埋蔵文化財について周知徹底を期すべく，昭和50年３月19日新潟県教育委員会に対して，長岡ニュータウン建設計画地域の埋蔵文化財包蔵地等の確認調査を実施して欲しいとの口頭要請があった。

この要請を受けた県教育委員会は，昭和51年７月12日長岡ニュータウン建設計画区域内の遺跡分布調査及び遺跡確認調査を昭和51年度に実施するという委託契約を公団と締結し，予備調査，第１次集中調査，確認調査，さらに第２次集中調査をおこない，長岡ニュータウン総面積1,000*ha*のうち昭和51年度には520*ha*について分布調査の結果22遺跡が確認，発見された（長岡ニュータウン遺跡分布調査報告書〔Ⅰ〕1977）。その後，県教育委員会は，新に発見された遺跡について昭和52年１月27日付けをもって遺跡発見届けを文化庁長官に提出するとともに，遺跡の評価と取扱いランク付けの部内検討を進め，基本的な方向についてとりまとめ，２月16日県教育委員会と公団は文化庁に出向き，今後の遺跡の取り扱いに関するそれぞれの処置及び調査体制，県市に係る事務の希望・要望を示して指導を得た（長岡ニュータウン遺跡調査報告書〔Ⅱ〕1978）。この指導及び県及び県教育委員会・長岡市教育委員会・公団の三者協議の結果をもとに公団は文化財保護法第57条の３にもとづく通知を提出し，県教育委員会は昭和52年８月17日にこれを文化庁に進達した。今回の５遺跡の発掘調査はこの通知に係る事業計画のうち，昭和53年度に実施する文化財の取扱いに関する事前協議の覚え書きによって新潟県が受託者となり公団と委託契約に基づいて実施したものである。尚，調査の期間，各遺跡の調査体制は下記のとおりである。各遺跡の調査の経過日誌は別に記載した。　（稲岡嘉彰）

発掘調査期間　昭和53年８月７日～８月12日　各遺跡の下草刈払い，伐採・現地測量及び器材搬入。
昭和53年８月17日　長岡市大積町１丁目大日寺に於て，塚・寺屋敷遺跡等の合同供養祭実施。
昭和53年８月18日～８月30日　観音山・寺屋敷・蛇山10号塚・中山１・２号塚発掘作業。

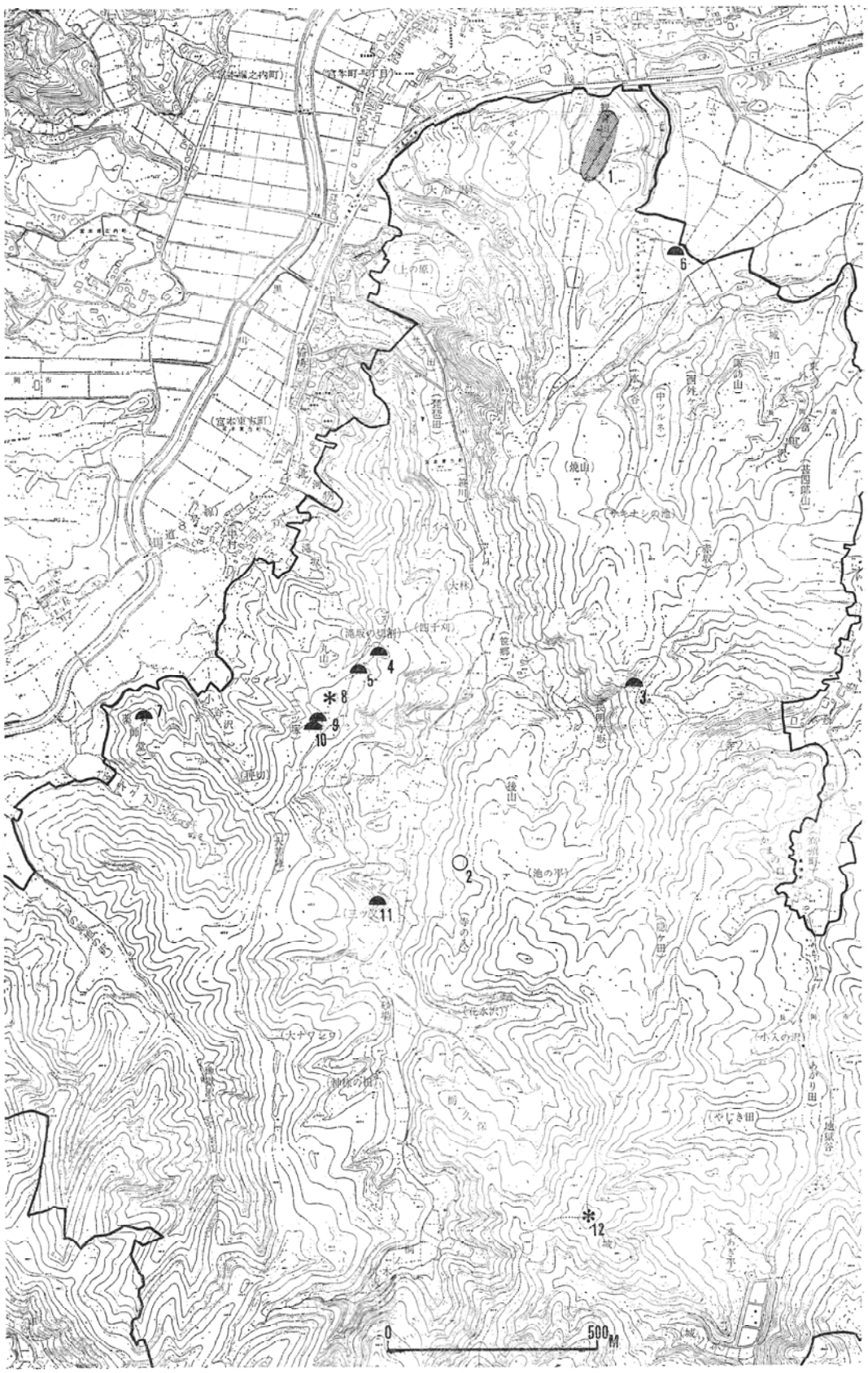
観音山遺跡
発掘担当者　斎藤　基生（県教育庁文化行政課学芸員）
調　査　員　竹田　陽子（　〃　嘱託）

寺屋敷遺跡
発掘担当者　戸根与八郎（県教育庁文化行政課学芸員）
調　査　員　箕輪　一博（　〃　嘱託）

蛇山10号塚
発掘担当者　稲岡　嘉彰（県教育庁文化行政課文化財主事）
調　査　員　家田順一郎（　〃　嘱託）

中山１・２号塚
発掘担当者　藤巻　正信（県教育庁文化行政課学芸員）
調査補助員　佐藤　寿幸（秋田大学　３年生）

作業員　長岡市白鳥町・宮本東方町・大積町一・二丁目・高頭町・善間町の有志
事務局　湯本　武（県教育庁文化行政課副参事）　森田　長治（県教育庁文化行政課主事）



第1図　遺跡位置図　　1. 観音山遺跡　2. 寺屋敷遺跡　3. 蛇山10号塚　4. 中山1号塚　5. 中山2号塚　6. 蛇山7号塚　7. 薬師堂の塚　8. 丸山城跡　9. 中山3号塚　10. 中山4号塚　11. 中山5号塚　12. 片刈城跡

観音山遺跡発掘調査報告書

〔I〕発掘調査の経過

長岡市宮本町１丁目東甲223—11～233—16地内における観音山遺跡の発掘調査は新潟県教育委員会（教育長　米山市郎）が調査主体となり，文化行政課埋蔵文化財係担当職員を中心として県内外の考古学研究者の協力を得て行なわれた。さらに地元宮本町１・２丁目からは作業員として有志の人々の協力を得て発掘調査を実施した。

８月７日～12日　発掘器材・用具の運搬。基本杭打ち，下草刈りを一部行う。

８月13日～16日　旧盆のため作業を休む。

８月17日　調査員宿舎に集合する。

８月18日　雨のため，作業を中止する。

８月19日　本日より作業員入る。先週残した下草刈り，グリッドの設定，発掘作業を行う。A—86・87，F—76・77，F—86・87，K—81・82，K—86・87，P—76・77，P—86・87，U—81・82グリッドを完掘する。遺跡の遠景写真を撮影する。

８月20日　昨日に引き続き下草刈り，グリッドの設定，発掘作業を行う。F—51・52，F—56・57，F—61・62，F—66・67，F—71・72，K—56・57，K—61・62，K—66・67，K—71・72，K—76・77，P—51・52，P—56・57，P—61・62，P—66・67，P—71・72，U—56・57，U—61・62，U—66・67，U—71・72，U—76・77グリッドを完掘する。国学院大学助教授小林達雄氏，長岡市教育委員会社会教育課学芸員寺崎裕助氏来訪。

８月21日　グリッドの設定および発掘作業を行う。F—26・27，F—31・32，F—36・37，F—41・42，F—46・47，K—21・22，K—26・27，K—31・32，K—36・37，K—41・42，K—46・47，K—51・52，O—21・22，O—26・27，O—31・32，P—36・37，P—41・42，P—46・47，U—21・22，U—26・27，U—31・32，U—36・37，U—41・42，U—46・47，U—51・52，Z—26・27グリッドを完掘する。遺跡の遠景写真を撮影する。

８月22日　トレンチの設定および発掘作業を行う。F—11・12，F—16・17，F—21・22，K—11・12，K—16・17，O—６・７，O—11・12，O—16・17，U—６・７，U—11・12，U—16・17，Z—11・12，Z—16・17，Z—21・22グリッドを完掘する。遺跡の遠景写真を撮影する。地域振興整備公団長岡都市開発事務所林氏他一名来訪。

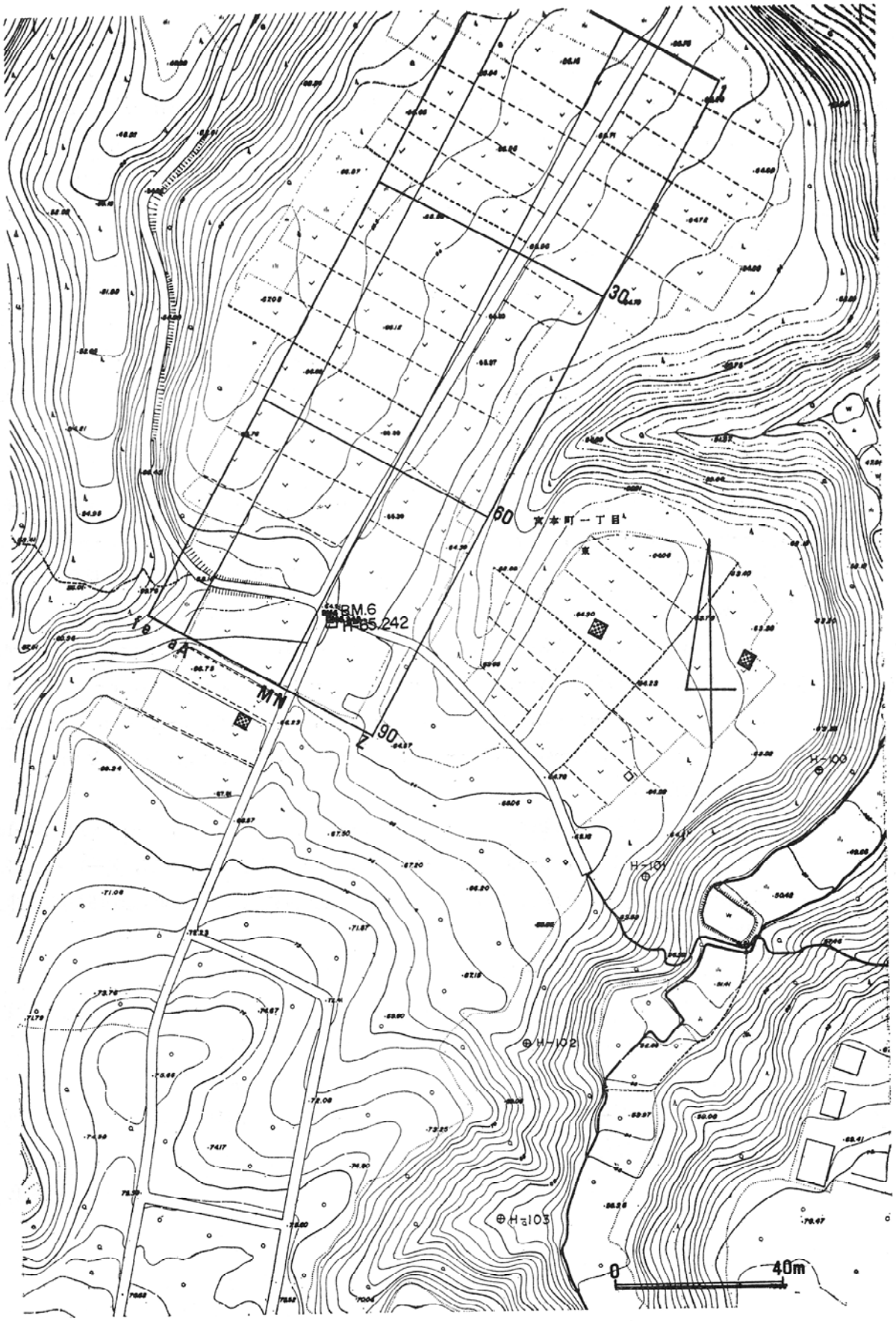
８月23日　発掘作業を行う。g～Y—74，R—61～74グリッドを完掘する。

８月24日　午前中は豪雨のため，作業を中止する。午後から発掘作業を行う。Z～Z_3—74グリッドを完掘する。e～L—69，N～V—69，d～T—74グリッドの間で部分的に深掘りをする。

８月25日　発掘作業を行う。A～68・69，R—75・88，U—86・87グリッドを完掘する。

８月26日　発掘作業を行う。A～K—78グリッドを完掘する。A～K—78グリッド南側のセクションをとり，写真の撮影を行う。器材・記録等の整理点検を行い本遺跡の発掘調査を終了する。

（竹田陽子）



第2図　観音山遺跡地形図

〔Ⅱ〕遺跡の立地

本遺跡は南西から北東へ斜状に延びた八石丘陵の一部である関原台地の北西端部にある長岡市宮本町1丁目東甲223—11～233—16に所在する縄文時代の遺物包含地である。南西から北東方向へ黒川が流れ，それによって出来た細長い沖積地が信濃川左岸の広大な沖積平野へと続いている。台地の先端部は国道8号線バイパス建設のため一部削られているが，その国道8号線バイパスより南へ約200*m*，関原台地の先端部近く標高約65～67*m*の緩傾斜面の台状台地上に位置している。

遺跡の南側は80*cm*程の段差があり，その一段高くなっているところは県営宮本原種苗畑であった。現状は畑であったが，数年前より耕作されておらず発掘調査時には1*m*以上の雑草が繁茂していた。この台地は東側に傾斜しておりグリッド設定内では傾斜の急なところで約3.5*m*，ゆるいところでは約2*m*程であった。（竹田陽子）

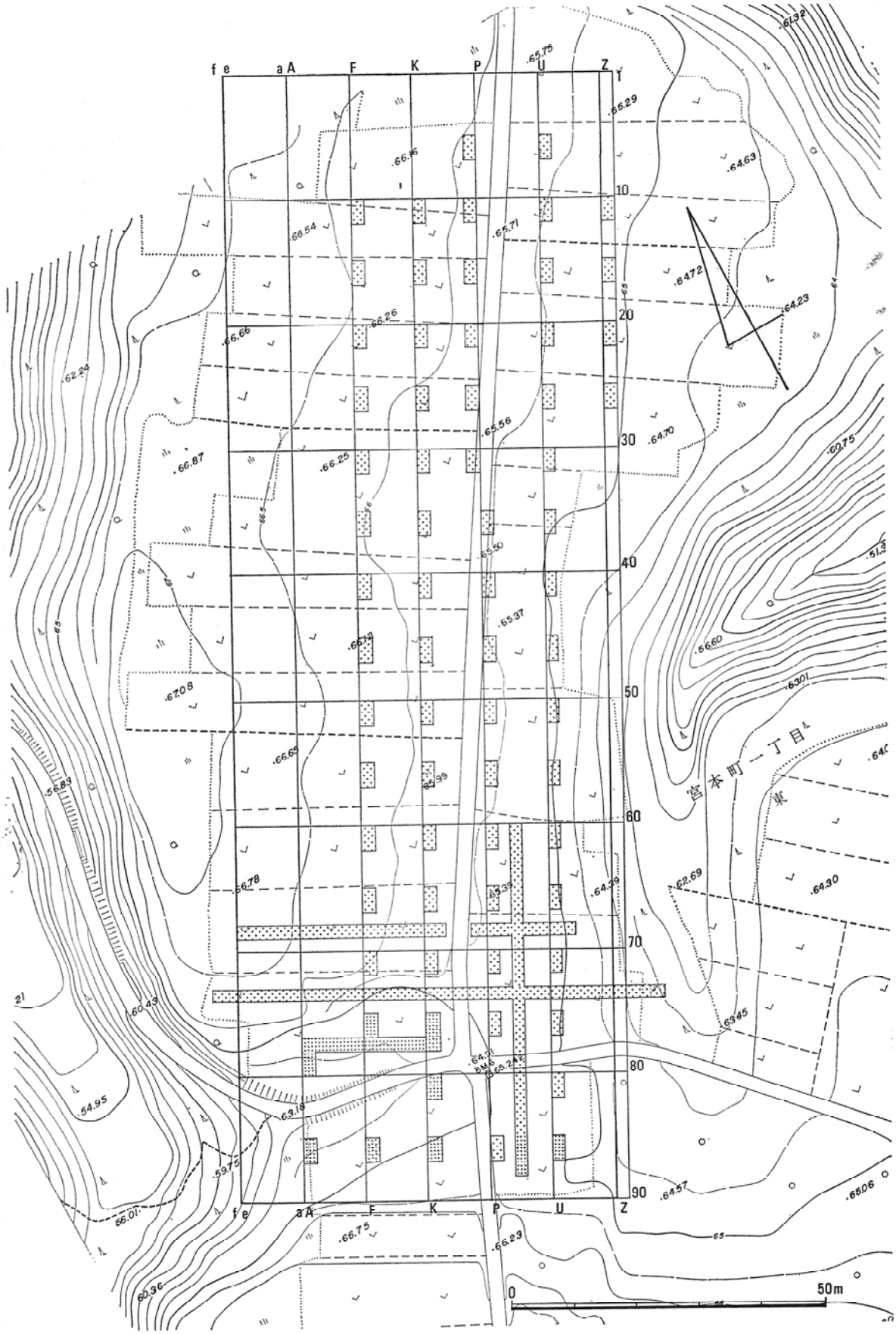
〔Ⅲ〕グリッドの設定

本遺跡は長岡ニュータウン建設に伴い長岡ニュータウン建設計画地域内の遺跡の分布調査で昭和51年7月に確認されたものである。新潟県埋蔵文化財調査報告書第10，長岡ニュータウン遺跡分布調査報告書〔Ⅰ〕では南北約60*m*，東西約30*m*の範囲の遺物包含地と報告された。遺跡発見の発端は昭和48年5月に宮本中学校の生徒が縄文土器片10数点を表採したものを，宮本中学校教諭多々静治氏が保管していたことにはじまる。しかし，その後数回にわたる現地踏査にもかかわらず1点の遺物も採集できず，表採したという地域には表土層にかなりの量の地山層が混入しており，遺跡自体畑等の耕作によってかなりの改変がなされていると考えられた。これらのことにより遺物の散布状態はきわめて稀薄で，又，その範囲も少ない縄文時代中期～後期の遺物散布地ではないかと思われた。このため遺跡の範囲，遺物の包含状況などは明確でなく発掘地点の選定は困難であったが，以前の表採資料や調査をもとにして第3図に示した地点を発掘調査の対象地域に設定した。

グリッドはほぼ南北に設けたが主軸はW—52°—Nであった。地域振興整備公団のベンチマークより20*m*程南側へいったところは一段高くなっており，そこは県営宮本原種苗畑である。グリッドはその段の下から以前宮本中学校の生徒が表採したという道が十字に交差している付近の畑を含み台地の先端部に向い長さ180*m*，幅62*m*の範囲に設定した。発掘調査対象地域には2×2*m*を基本区画として東西31グリッド，南北90グリッドを設定した。グリッドには西から東へg・f…a・A・B…Z・Z_1・Z_2・Z_3とアルファベットを，北から南へは数字を付しg—1，f—2，A—8のようにアルファベットと数字の組み合せをもってグリッド名称とした。なお，発掘区画は基本的に2×4*m*の2グリッドとした。（竹田陽子）

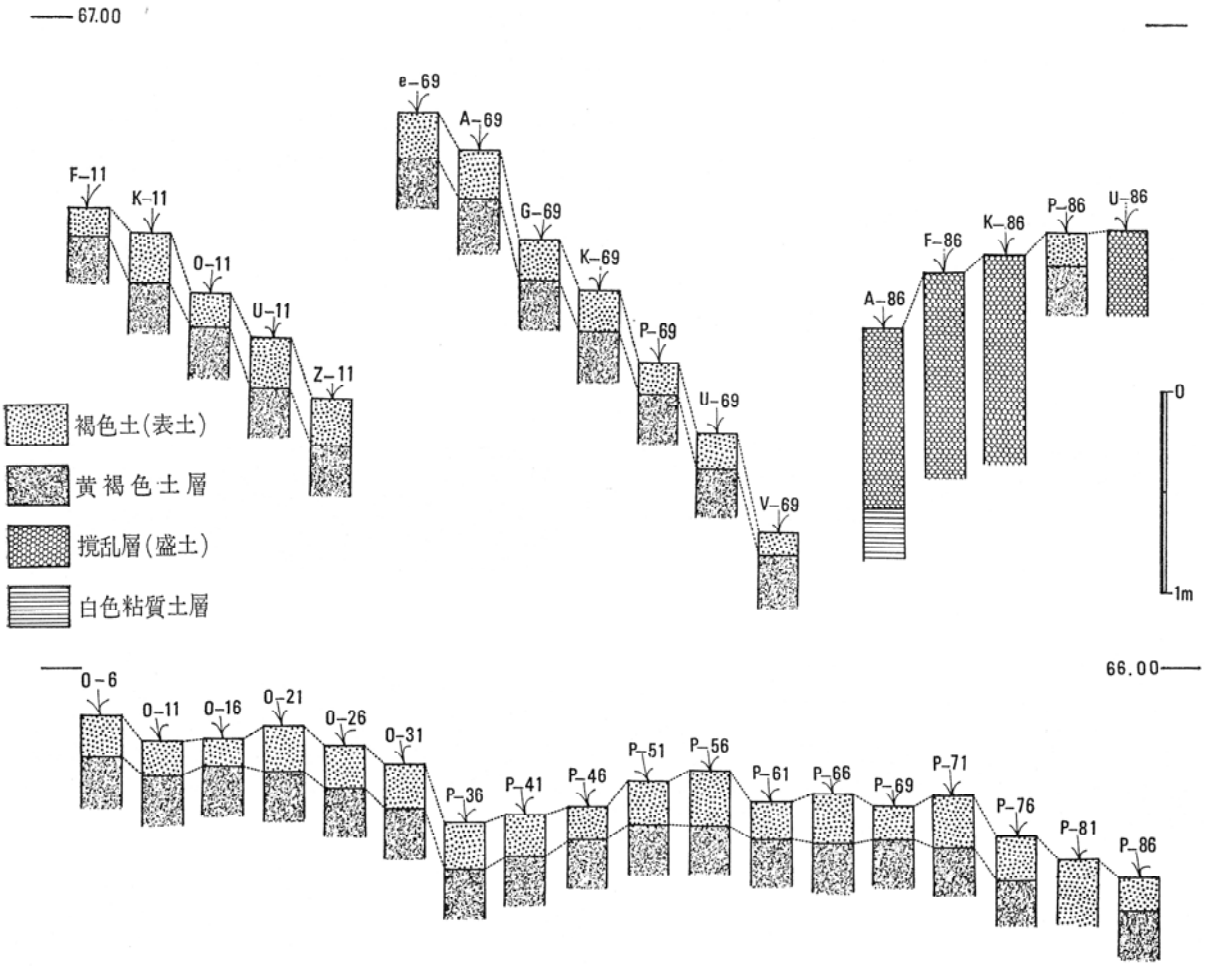
〔Ⅳ〕層序と遺物の出土状況

本遺跡の土層堆積状況は3タイプに大別される。基本的には褐色土層（表土），黄褐色土層，白色粘質土層であるAタイプ。白色粘質土層や赤色土層（ソフトローム）の上に攪乱層（盛土）がのっている場合のBタイプ。黒褐色土層（旧表土），黄褐色土層，黒色土層，赤色土層（ハードローム）の上に攪乱層（盛土）がのっている場合のCタイプ。これらのうちAタイプおよびBタイプは全く包含層がない。又，大部分はAタイプであるが遺跡の南側の一部，A～D—78，A—79・80，K—81・82，A—86・87，F—86・87，K—86・87，R—86・87・88，U—86・87はBタ



第3図　観音山遺跡グリッド設定図

イプであり（第３図で濃いスクリーントーンで示した），Ｆ―76・77，Ｋ―76・77，Ｄ～Ｋ―78はＣタイプである。念のためグリッドの東側と南側を試掘した（第２図に試掘個所はスクリーントーンで示した），Ｚ―61グリッドから東へ70*m*のところでは，表面より－20*cm*までが褐色土層（表土），－50*cm*までが黄褐色土層，以下白色粘質土層のＡタイプ。又，Ｚ―66グリッドから東へ35*m*のところでは表面より－20*cm*までが褐色土層（表土），－60*cm*までが黄褐色土層，以下白色粘質土層のＡタイプでいずれも包含層はなく，東側に延びているこの台地にも包含層はないものと思われた。さらに，Ｋ―90グリッドから南へ10*m*のところでは表面より－10*cm*までが褐色土層（表土），－30*cm*までが攪乱層（盛土），－70*cm*までが暗褐色土層，－90*cm*までが黄褐色土層，以下白色粘質土であり暗褐色土層は旧表土と思われ，これもＡタイプで包含層は全くみられない。これらのことにより木遺跡には包含層とはっきりいえるものはなく，しいてあげるならばＦ―76・77，Ｋ―76・77，Ｅ～Ｋ―78付近に一部みられた黒色土層をあげることが出来る。そこで黒色土層がみられたＢ～Ｋ―78グリッドの南壁のセクションを図示したが，第５図のとおりである。堆積状況を説明すると第１層は攪乱層（盛土）で所により差はあるが約20～70*cm*の堆積がある。第２層は黒褐色土層で一部のみにみられ旧表土と思われる。第３層は二種類あり一つは黄褐色土層，もう一つは赤色土層のソフトロームでありＢ～Ｄ―78グリッドのみにみられる。第４層は三種類あり第３層の黄褐色土と黒色土の混ったもの，赤色土（ソフトローム）と黒色土の混ったもの，それから黒色土層である。第５層も二種類あり赤色土（ソフトロームブロック），黒色土と赤色土（ハードローム）の混ったもの。第６層は赤色土層（ハードローム）の地山である。包含層と明確にいえるものはないが第４層の黒色土層をあげた場合，Ｅ～Ｋ―78グリッド付近のみの堆積であり，しかも水平堆積では



第４図　観音山遺跡土層柱状図

なくかなりの撹乱状況であり不明な点が多い。

今回の発掘調査で遺物が出土したのは縄文土器の小片１点のみであり，これはE—78グリッド第４層からの出土である。あとは同じく縄文土器片がA～C—73～75グリッド付近で４点表採されただけであり，この他に石器一点が表採されている。

（竹田陽子）

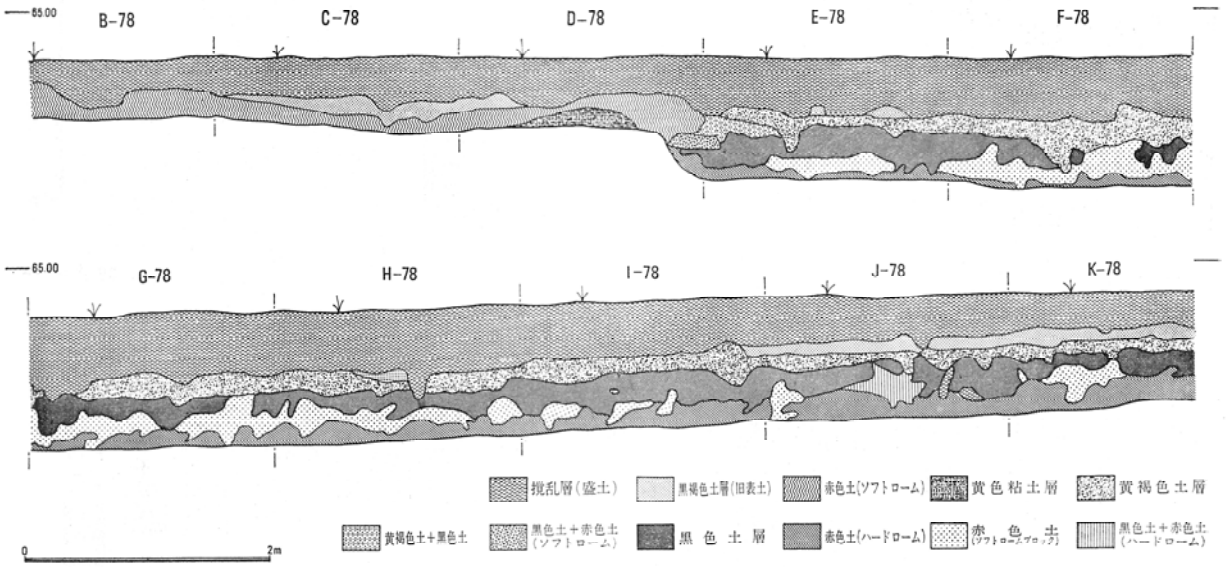
〔V〕 遺　　物

今回の発掘調査で出土した土器は１点のみで他はみな表採されたものである。表採されたものは縄文土器片４点で細片１点以外は図示した。又，石器は表採品１点のみである。なお，それ以外のものは昭和48年５月宮本中学校生徒による表採資料で多々静治教諭保管のものを使用させていただいた。

石器（第６図，図版第３図１～13）　　最長7.4cm，最大幅5.3cm，最大厚3.2cm，重量122gの安山岩製の剝片である。頭部ちかくに多くの調整がはいっており，末端の一部に礫面を残している。剝離角は113°とかなり鈍角である。使用痕はみられない。

縄文土器（第７図１～13，図版第３図１～13）　　１は唯一の出土品でありE—78グリッドの壁際，第４層の黒色土層からの出土である。無文の縄文土器片であり，焼成はやや良好で色調は黄褐色を呈している。２～４は今回の調査で表採された縄文土器片である。２は器面が荒れており特に外面は半分以上剝落しており表面の文様等は不明である。焼成はやや良好で黄褐色を呈す。３は無文の縄文土器片で焼成は良好，堅緻な土器片で色調は赤褐色を呈す。４も無文の縄文土器片で内面が剝落している。焼成はやや良好，淡褐色を呈す。

５～13は多々静治教諭保管のものである。５はキャリパー形の深鉢土器の口縁部破片である。口縁部には篦状工具による１条の沈線が押引され，その下にも斜状の沈線が施文されている。なお，口縁部には把手があるものと思われる。焼成は良好で色調は黄褐色を呈す。６は平行沈線文が施されている縄文土器片で胎土には雲母・小硅石が混入されている。焼成は不良で色調は暗褐色を呈す。７は縄文が施されている厚めの破片であり，焼成は良好で褐色を呈す。８～13は無文の縄文土器片でいずれも外面にヘラ整形の痕がみられる。又，外面は比較的しっかりしているが，内面は荒れている。焼成は良好で黄褐色を呈している。



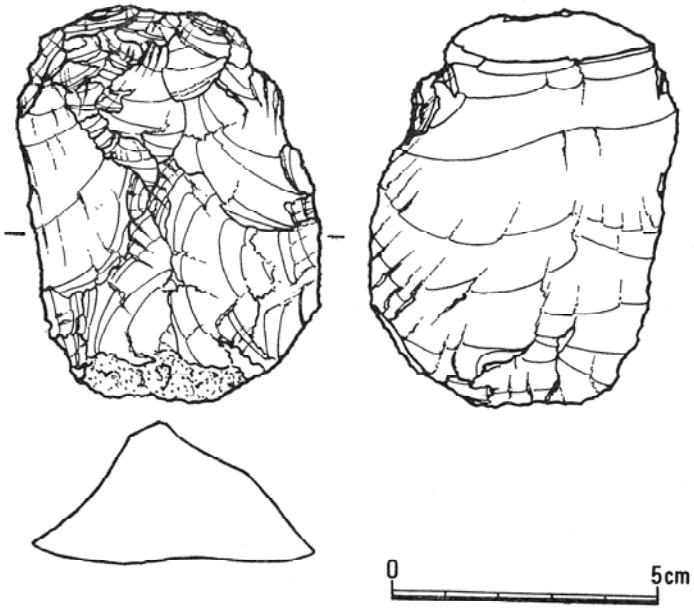
第５図　観音山遺跡土層断面図

今回の発掘調査で出土したものや表採したものから時代を求めることは困難であるが，以前に表採したものから考えると縄文時代中期後半～後期頃のものではないだろうかと思われる。（竹田陽子）

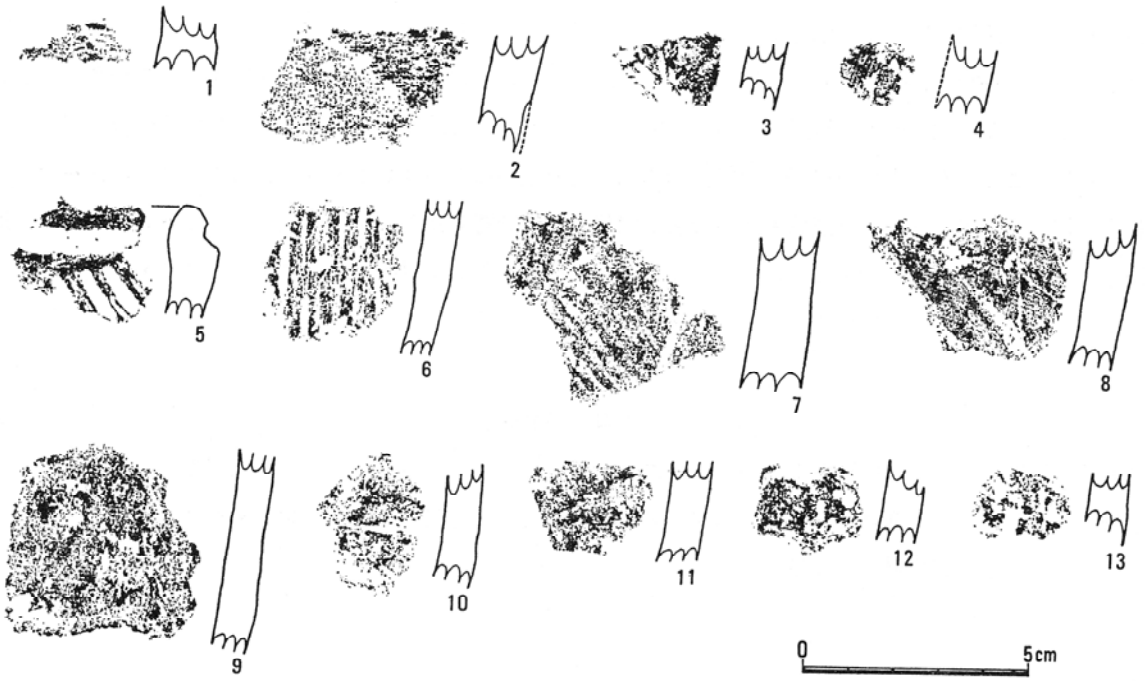
〔Ⅵ〕 ま　と　め

この付近は作業員の話によると明治初年頃，桑畑として開墾しその際お蚕小屋を作るために地ならしをしたとのことである。この台地は東から西へゆるく傾斜しているが，遺跡内の高い北側から低い南側へ土を移動した跡は土層断面からもみられない。遺跡の南側の一部，F—76・77，K—76・77，A～K—78，A—79・80，K—81・82，A—86・87，F—86・87，K—86・87，R—86～88，U—86・87グリッドにはそれぞれ20cm～2m以上盛土されているが，ちょうどそこには2つの小さな沢が入り込んでおり以前はもっと深かったが，埋土をし現在の地形になったとしても十分納得がいく。地ならしをしたという部分はここのことであるという可能性はある。

又，K—81・82，A—86・87，F—86・87，K—86・87，R—86～88，U—86・87グリッドでは白色粘質土の上に攪乱層がのっており，A—86グリッドでは表土より－90cmのところで掘り込みの底面である白色粘質土が出て来たがR—88グリッドでは地表より－2



第6図　観音山遺跡出土石器実測図



第7図　観音山遺跡出土縄文土器拓影

mまで掘り下げたが瓦片混りの攪乱層はまだ続いていた。この攪乱は瓦をつくるための粘土を取った跡であることがわかったが，その瓦屋は今でも上除町で営業しておりその店の話によると明治生まれのおじいさんがやっていたのでいつ頃から粘土を取り始めたかは不明であるが昭和10年頃はやっていた。一カ所の粘土では瓦は出来ないので関原や上除の数カ所から粘土をとっていた。しかし，戦時中燃料がなくなってきたので瓦作りは自然に中止した。なお，瓦は上除の八幡様のとなりで焼いていたとのことである。以上のことによりこの白色粘質土の上に攪乱層がのっているところは瓦の粘土を採取していた地域であることがはっきりした。

本遺跡の位置する関原台地の先端部には大小の縄文時代の遺跡が所在する。この台地に限っていえば現在，中期9，中期～後期4，後期9，晩期2遺跡，計24遺跡に達する。大遺跡では三十稲場遺跡（中期末～後期）関原1丁目藤沢・糠山所在。馬高遺跡（中期）関原1丁目中原所在。藤橋遺跡（晩期）福田町藤橋所在のこれら3遺跡は国指定史跡でもある。この他に尾立遺跡（晩期）富岡町尾立所在。岩野原遺跡（中期初～後期末）深沢1丁目所在の5遺跡があり，これらは台地の東側を除いた三方に点在している。又，本遺跡周辺で小さいものでは鎌田山遺跡，白鳥町原新田所在で本遺跡より東へ約1,700m，国道8号線バイパス付近で縄文中期の土器片が少々出土したが農地整備事業のため堙滅。蛇山遺跡，白鳥町蛇山所在で本遺跡より東へ約600m，ここは北陸高速自動車道建設に伴う土取用地で県教育委員会が昭和49年7月発掘調査を実施後堙滅。平安時代の遺構と遺物が検出されたがその際，縄文時代後期の土器片15点，磨製石斧，石鏃が各1点出土した。城扣遺跡，宮本東方町蛇山所在で本遺跡より南東へ約700m，縄文中期の土器片が平箱1枚，この他磨製石斧，土器片多数が出土した。蛇山7号塚，宮本1丁目蛇山所在で本遺跡より南東へ約300m，この塚は昭和52年10月，長岡ニュータウン建設に伴い発掘調査を実施し明治以降の塚ということが判明したが，その際に縄文時代中期の土器片1点と打製石斧1点が出土した。又，今回の調査で聞いたところによろれば10数年前，蛇山7号塚の上，県営宮本原種苗畑で石斧が採集されたという。

これらの遺跡を小林達雄氏の説によるセトルメント・システムにあてはめてみると，三十稲場・馬高・藤橋・尾立・岩野原遺跡はAパターンとなり，未発掘ではっきりしないが城扣遺跡はCかDパターン，この他，鎌田山，蛇山遺跡，蛇山7号塚およびその上方はEかFパターンとなるのではないか。

宮本中学校の生徒が土器を表採したという地点は道が十字に交差している北東側，P～Z—60～76グリッド付近であり発見した当時は沢には清水が湧き湿地帯になっていたそうである。今回の調査で表採した地点は畑より一段高い桐畑の中でA～C—73～75～グリッド付近である。又，出土した土器はE—78グリッド第4層からである。これらのことより考えると遺物は2つの沢付近から出土，表採されており，この沢は盛土されており以前は沢が深く入っていたと思われる。このような立地や土器等の状況からみると前記のセトルメント・システムでいうEパターンの土器製作用粘土の採掘跡，Fパターンの遺物・遺構などの実体として確認しえないが，一晩だけのキャンプ地とか，道・狩猟・採集の場等のいずれかが想定できるのではないか。本遺跡より2km以内にはAタイプの馬高・三十稲場遺跡も存在し，この観音山遺跡がそれに伴うE・Fパターンである可能性は十分考えられることである。　（竹田陽子）

〔参考引用文献〕

寺崎裕助他（1977）　「観音山遺跡」長岡ニュータウン遺跡分布調査報告〔I〕新潟県教育委員会

小林達雄　（1973）　「多摩ニュータウンの先住者—主として縄文時代のセトルメント・システムについて—」月刊文化財　1月号

寺屋敷遺跡発掘調査報告

〔I〕発掘調査の経過

本遺跡については昭和51年度の長岡ニュータウン地内の遺跡分布調査の際に新しく発見されたものである。寺屋敷という伝承等を残しているものの，それを想定するような遺構・遺物は確認されていない。発掘調査は新潟県教育委員会（教育長　米山市郎）が発掘調査主体者となり，県教育庁文化行政課埋蔵文化財係の職員を中心に，県内外の考古学研究者及び大学生の協力を得た。更に，地元の大積町一丁目，堀之内町の有志の方々には作業員として協力を得て昭和53年８月７日から26日まで延19日間にわたって発掘調査を実施した。

８月７日～12日　発掘器材及び用具の搬入を新潟から現地へ行うと共に，下草刈・基本グリッドの設定を行なう。また，縮尺1/100で調査対象予定地の地形測量を20cmコンターで行なう。

８月13日～17日　旧うら盆会のため発掘調査を中断し，５日間休みとする。

８月18日　遺跡の遠景・近景の写真撮影を行なった後，実質的発掘調査に着手する。発掘に際しては調査対象地域全域（約1,500m²）に３m四方の網目をかぶせ，市松文様にグリッドを掘り下げることにし，遺構等が確認された場合は全面発掘に切り替えてゆくことを基本的態度とした。また，遺物は１片ごとに一連番号を付し，出土地点の混同を極力さけることにした。Ｃ１・Ｃ３・Ｄ２・Ｄ４・Ｅ３・Ｅ５・Ｆ４・Ｆ６に着手し，Ｄ４・Ｆ６を除いて完了する。Ｃ１の南側で直径約2.5mの円形の落ち込みが確認される。出土遺物はない。

８月19日　前日に引き続いてＤ４・Ｆ６に入るとともに新しくＣ７・Ｄ６・Ｄ８・Ｅ７・Ｅ９・Ｆ８・Ｇ７に着手する。いずれも完了する。Ｅ９の南西隅で１辺0.8m前後の方形と推定される落ち込みが確認される。出土遺物はない。

８月20日　B14・C11・C12・C13に着手したが，１～10ラインに比して地山面までは深く，遺物包含層が存在する可能性があると推定された。

８月21日　前日に引き続いてC11・C12・C13に入る。現地表面下約80cmで地山面に達するが遺物包含層というものは存在せず，１点の遺物すら検出することはできなかった。

８月22日　２ヶ所で確認された落ち込みの周辺部，即ちＢ１・Ｂ２・Ｃ２・E10・Ｆ９・F10を拡張する。Ｃ１で検出された落ち込みはＣ２にまたがるもので，長径約2.5m，短径1.6mの円形を呈す炭焼窯と推定された。Ｅ９で検出された落ち込みはＦ９・F10・E10にまたがるもので，長辺1.6m，短辺1.0mの長方形を呈すものと判明する。更に，Ｅ９を精査すると焼土が直径40cmの範囲で長方形の落ち込みの北辺から約80cm離れた所から検出された。性格は本日の所不明。

８月23日　炭焼窯と長方形の落ち込みの内部を掘り下げる。長方形の落ち込みは南側に焚口を持つ平窯の炭焼窯で，前日確認された焼土は排煙口と判明した。今後，円形の炭焼窯を１号炭焼窯跡・平窯の炭焼窯を２号炭焼窯跡と呼称することにする。本日で２基の炭焼窯の掘り下げは完了する。

８月24日　本日までに柱穴との遺構は全く確認されていないので，A11～A13，B12に着手したが，今までと同様屋敷の存在を裏付ける様な柱穴は確認されなかった。２基の炭焼窯跡の平面実測を縮尺1/20で行なうと共に写真撮影を行なう。

８月25日　Ｃ４・Ｃ６・Ｃ８～C10・Ｆ２・Ｆ３に着手したが遺構・遺物は全く検出されなかった。縦横の土層断面図の作成を縮尺1/20で行なう。

８月26日　器材・用具・記録の整理点検を行なって本遺跡の現地作業は完了した。　（戸根与八郎）

第8図　寺屋敷遺跡周辺の地形と遺跡の位置

〔Ⅱ〕遺 跡 の 立 地

本遺跡は長岡市宮本東方町東山2438，2440番地に所在し，八石丘陵の桝形山（標高299.6m）から北に派生する一支陵の中央部より先端に近い西側斜面の中腹に立地し，標高約91mをはかる（第８図・図版第４図）。眼下には桐ノ木沢に源を発し百渡橋付近で，二級河川の黒川に合流する笹川が沢筋に沿って南から北へ流れている。遺跡は南北約50m，東西約30mの平坦地で，東側から西側へ，北側から西側へゆるやかに傾斜しており南側・北側・西側の端部から先は急崖となっている（第９図）。本遺跡と笹川との比高は約27.5mをはかる。現状は荒地であるが，往時は畑地として利用されていた所でもある。本遺跡の南東約0.9km先には中世の片刈城跡が，笹川をはさんだ対岸には中山５号塚，尾根上には中山１号塚・２号塚・３号塚・４号塚・６号塚が存在している。（戸根与八郎）

〔Ⅲ〕グリッドの設定と土層

発掘調査にあたって，昭和51年の分布調査結果を検討した結果，寺屋敷という伝承と過去に遺物らしきものが出土しているという事実から，内容究明のため発掘調査を実施することにし，東西20m，南北45mの範囲の平坦地を調査対象地とした。グリッドの基線はＮ14°Ｅで，３×３mを１区画として第10図の如く設定した。グリッドには東から西にアルファベットを，北から南に数字を付し，アルファベットと数字の組合せをもってグリッドの名称とした。

地表面は北から南及び東から西へ緩傾斜をし，東西線では12ラインで50～70cmの段差がある。土層も段の北側・南側で差があり，北側では第Ⅰ層（茶褐色土）が15～20cmの厚さですぐ第Ⅳ層（赤褐色粘土）の地山に達している。地山の傾斜と地表面の傾斜は一定し，わずか先端部に行くと若干第Ⅰ層が厚くなっている程度である。段の南側では第Ⅰ層と第Ⅳ層の地山との間に，しまりのない茶褐色粘土（第Ⅱ層）としまりのある暗茶褐色粘土（第Ⅲ層）があり，その南端は明らかではないがレンズ状堆積をしているものと思われる。Ｃ11の地山面と第Ⅱ層上面はほぼ水平で，意図的に埋積して平坦面を造成したものとも考えられるが，つき固めたような痕跡は全く認められない。（戸根与八郎）

〔Ⅳ〕調査の結果とまとめ

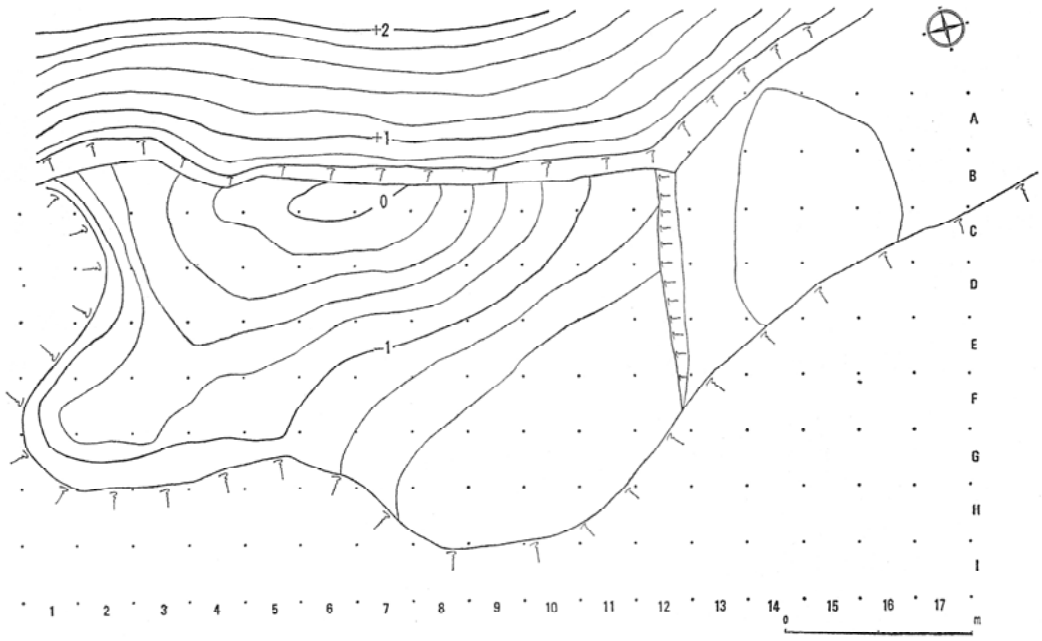
調査の結果，当初想定していた寺の存在を裏付けるような遺構・遺物は全く確認されなかった。また，平坦地についてはＣ11以南が造成したものとも考えられたが，版築された痕跡は全くなかった。県内でも○○屋敷と呼称されて，遺構・遺物を伴うものと全く伴わないものとがある。本遺跡のように伝承のみで遺構・遺物が全く確認されないということは，伝承の域を出ない場合とある時点まで寺そのもの（草庵的なもの？）が存在し，後世の耕作ないしは土地の改変で全壊した場合の三者があり，このいずれかであろう。しいて言うならば，遺物が以前に発見されているものの土層の状態・遺構の存在を示す一端も確認されないことなどから伝承の域を出ないものと考えられる。

宮本東方町は笹郷の沢の中におこり，黒川の治水によって追々現在地へ移ったといわれている（1977　山崎弥作）。また，地名からも，笹郷の谷には長明寺坂・寺の入などの地名があるとともに，前述した如く周辺には塚が存在している。いずれにせよ，地域全体を総体的に把握する事によって，そのものの存在が明らかになる可能性があり，今後の調査・研究にまちたい。

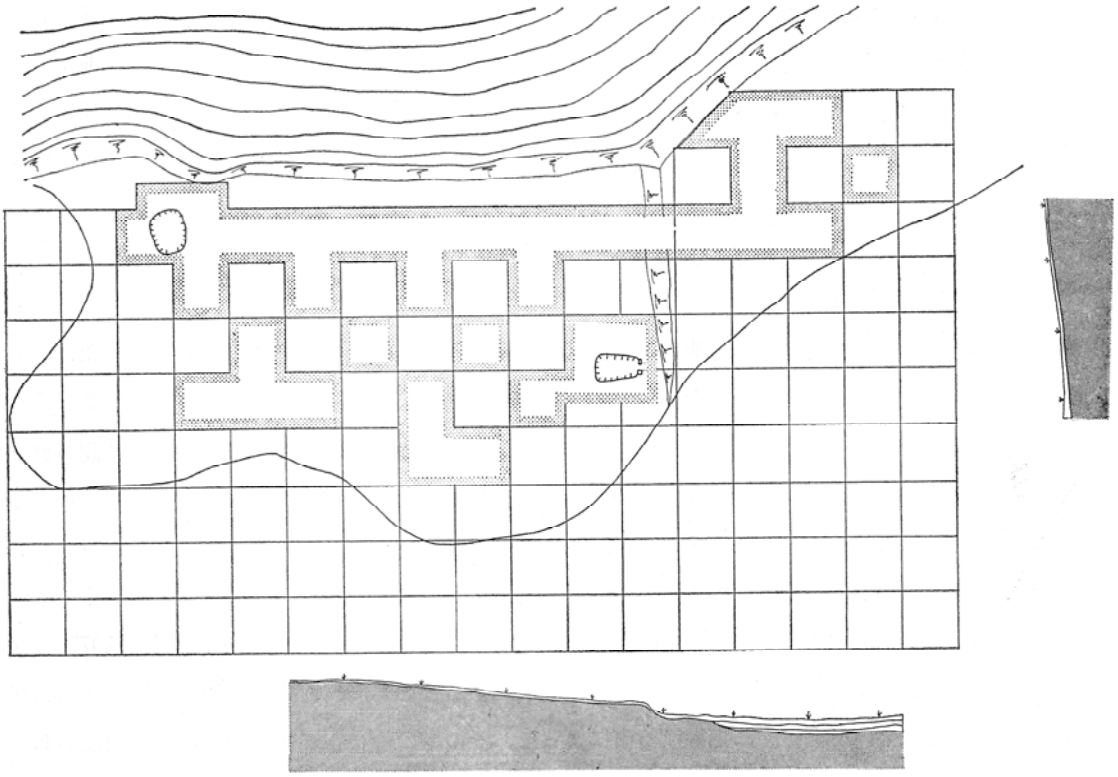
（戸根与八郎）

〔参考引用文献〕

山崎　弥作（1977）　「中山３号塚・４号塚」長岡ニュータウン遺跡分布調査報告書〔Ⅰ〕新潟県教育委員会



第9図 寺 屋 敷 遺 跡 地 形 図



第10図 寺屋敷遺跡グリッドの設定と土層

付篇，炭焼窯跡について

本遺跡の発掘調査において２基の炭焼窯跡が検出されたので付篇として本報告の中に掲載することにした。形態的には方形のものと焚口・燃焼部・焼成部・煙道を具備した古代の須恵器，瓦を焼く平窯に近似したものとがある。いずれも平坦面にあるものの，崖面に近接した所に位置している。

１号炭焼窯跡（第11図・図版第６図）

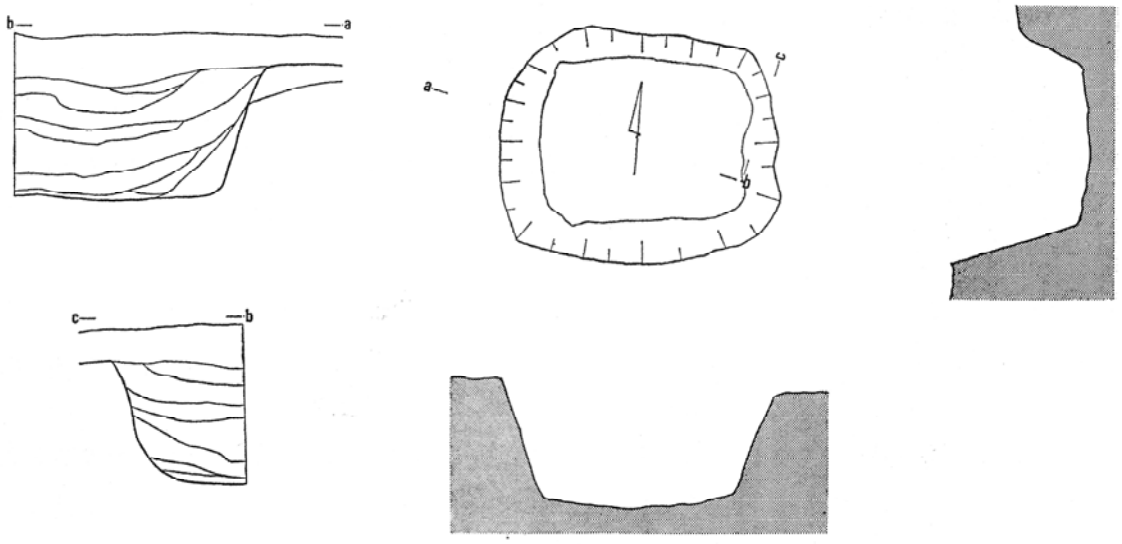
Ｂ１・Ｂ２・Ｃ１・Ｃ２にまたがって検出されたもので，現地表面下約40cmの第Ⅳ層（黄褐色粘土層）を掘り込んでいるが，恐らく第Ⅰ層から掘り込んで構築されたものと推測される。平面形態は方形というよりも小判形を呈し，長軸線はＮ 94°Ｗを示している。上面の長径2.35m，短径1.92m，底面の長径1.75m，短径1.35mを測る。壁面は65°～70°の角度を有し，深さは第Ⅳ層の確認面から北壁で0.55m，南壁で1.1mを測る。壁面は２～３cmの厚さで硬く焼けている。特に壁面の下部は上部に比して硬く焼けており，その厚さも厚い。底面は中央部がやや凹む程度で平坦といってもよく，壁面上部と同様に焼けている。内部には底面に接して木炭ないしは粉炭が５～６cmの厚さで堆積し，この上に礫を含む暗褐色土や木炭や粉炭を含む暗褐色土がレンズ状に堆積していた。なお，本窯跡からは年代を示すような遺物は１点も検出されなかった。

２号炭焼窯跡（第12図・図版第７図）

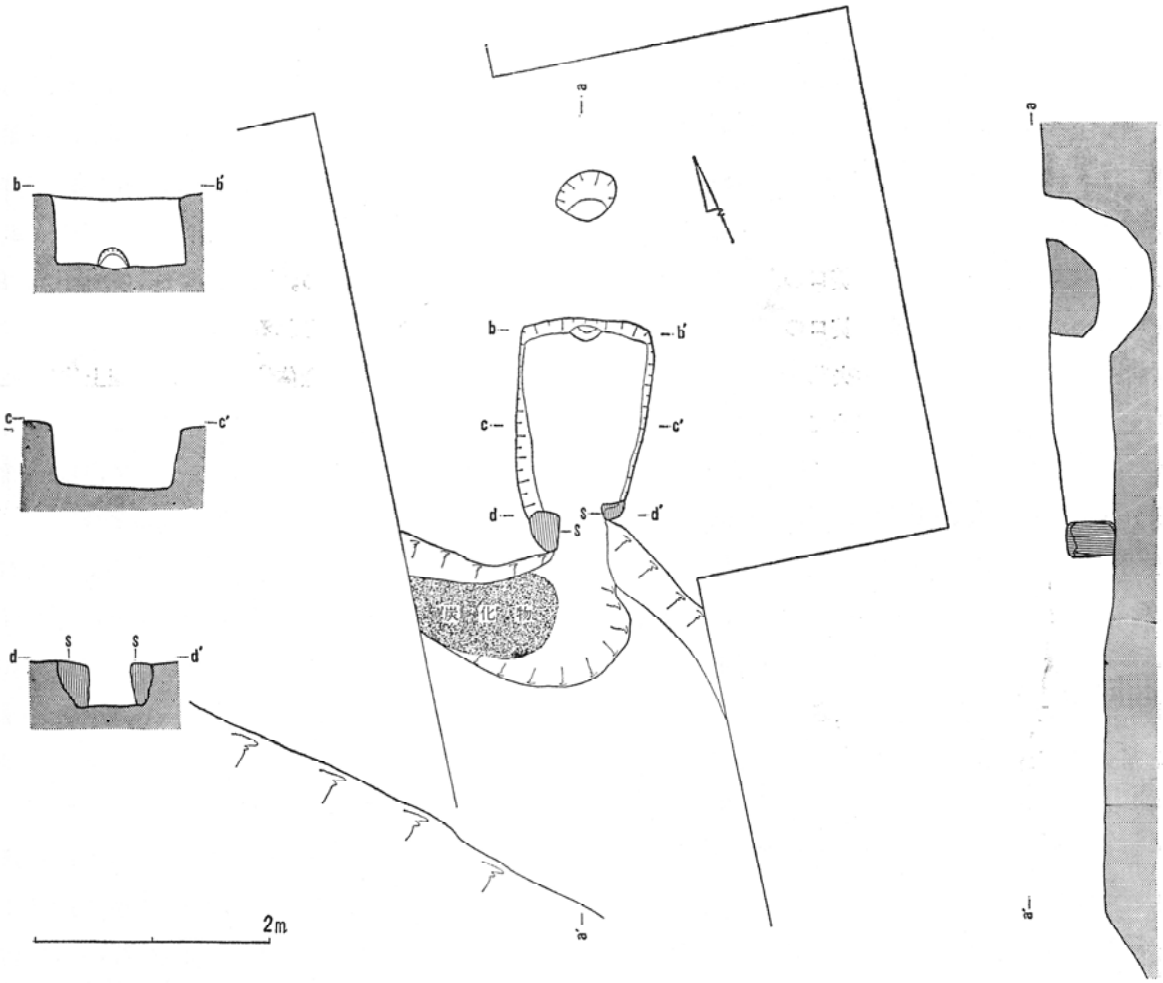
Ｅ９・Ｅ10・Ｆ９・Ｆ11にまたがって検出されたもので，現地表面下約30cmの第Ⅳ層（黄褐色粘土層）を掘り込んでいるが，１号炭焼窯跡と同じように第Ⅰ層から掘り込んだものと推測される。平面形態は砲弾形を呈し，主軸はＮ 26°Ｅを示し，東から西に傾斜する傾斜面にほぼ平行している。焚口から奥壁までの奥行きは約1.9m，奥壁の幅1.1mで，窯体の最大幅も奥壁にある。窯底の傾斜角度は２～３度を測り，若干焚口の方に傾斜している。焚口は地山の黄褐色粘土層を掘り込んでおり，焚口の左右には砂岩質の石が縦位に立てられている。石は比較的よく焼けて，亀裂が入り非常にもろくなっていた。焚口の幅は43cmで，高さは40cm程度のものと推定される。窯壁の角度は側壁・奥壁ともにほぼ垂直であるが，窯体中央部のみ若干外側に開いている。窯壁の焼け方は全体的に弱く，窯底上約15～20cmまでの側壁・奥壁は比較的よく焼けている。なお，窯底は厚さ１cmで真紅に焼けている。煙道は直径30～50cmの掘り抜きで，奥壁から北へ約１mの地点に開口している。排煙口は幅20cm，窯底からの高さ20cmで半月形に作られ，煙道の奥壁寄りの底面角度は約18度，排煙口出口直下の底面角度は60～70度を測る。煙道の壁面は灰黒色を呈し，タールが付着してコークス状になっている。窯体内部には窯底直上に木炭及び粉炭層が１～２cmの厚さで全体的に堆積し，その上に焼土粒や礫を含む暗褐色土がレンズ状に堆積していた。前庭部は地山を約40cm削り，扇形を呈し，焚口付近は更に若干半月状に凹められ木炭片や焼土が４～５cmの厚さで堆積していた。検出された遺物は黒炭の破片のみで，年代を如実に示す遺物は１点も検出されなかった。本窯跡は天井部が現地表面上に出るものと考えられ，焚口・煙道のみを掘り抜いたもので，壁面の焼け方などからあまり長期間にわたって使用されたものとは考えられない。なお，本窯跡周辺においては窯跡に伴うような柱穴等を確認することはできなかった。

この種の炭焼窯跡については炭以外に遺物を検出することは稀にしかなく，その築造年代については幕末～明治時代のものと見られるのが一般的であるが，中には第２次世界大戦後のものもある事などから，一概に年代を明確にする事は出来ないのが現状である。炭焼窯については新潟県埋蔵文化財調査報告書第９〝片田遺跡〟（1977）の付篇で詳細な報告・考察がなされているので参照されたい。

（戸根与八郎）



第11図　寺屋敷遺跡第１号炭焼窯跡実測図



第12図　寺屋敷遺跡第２号炭焼窯跡実測図

蛇山10号塚発掘調査報告書

〔I〕発掘調査の経過

本遺跡については昭和51年度に実施した長岡ニュータウン地内の遺跡詳細分布調査の際に新しく発見されたもので名称については，蛇山地区にはすでに9基の塚の存在が確認されており一連番号が付され（金子拓男・和田寿久1976)，通称のない本塚はそれを踏襲して10号塚とした。発掘調査は新潟県教育委員会（教育長　米山市郎）が調査主体となり文化行政課埋蔵文化財係担当職員を中心として県内外の考古学研究者の協力を得た。さらに地元高頭町・白鳥町・大積善間町・宮本堀之内町の有志の方々から作業員として協力を得て発掘調査を実施した。

8月7日～12日　昭和53年度長岡ニュータウン地内発掘対象各遺跡地の下草刈り・伐採・基本グリッドの設定・地形測量を行う。各発掘地点に発掘器材・用具の搬入を完了し，旧盆後の作業実施に備えた。

8月17日　調査員宿舎に集合。雨天のため現地で実施する塚等の供養祭を大積町一丁目の大日寺にて住職佐藤正道師の先導で行う。地域振興整備公団・文化行政課埋文係職員，地元を代表して善間町の区長の参列を得た。

8月18日　雨天のため作業中止する。午後から担当職員により調査の事前準備として，調査対象地全域約180㎡に塚の中心杭を基軸として3m四方の網目をかぶせ，グリッドの設定を完了した。

8月19日　本日より作業員投入する。午前中抜根作業と清掃作業を実施する。写真撮影後，午後から塚の本体を東西・南北に直交する十文字セクションを残す様に，扇形に表土はぎを行う。

8月20日　昨日に引き続き，同作業を継続する。南西部・北東部の扇状カットを6割近く完了する。塚頂部中心杭を半径約1.8mで—約60cmでレンガ色を呈する赤褐色の粘性土（工事関係者は赤ネバと称している）の盛土に達する。基盤層と同じ性質が認められる。地山基盤層の直上には厚さ約10cmの黒味のある褐色土層が堆積。塚構築当時の表土層と推定した。

8月21日～22日　稲岡本庁へ出向を命ぜられる。南東部・北西部の扇状カットの作業と併行し清掃に入る。21日公団林氏現場来訪。

8月23日　塚の十文字セクション掘削をほぼ完了し，塚の頂点とする周辺9m×6mラインの表土はぎを行う。写真撮影及び南東部・北平部の清掃を行う。塚遠景を南東松木上から撮影する。

8月25日　午前中は豪雨のため作業中止。午後から表土はぎ及び完了面のジョレンによる清掃を行う。

8月26日　塚の北西，道路に面した凹みは表土からも観察できたが，完掘と実測による精査の結果，下部に灰と微量の炭が検出され，いわゆる鍛冶子焼炭窯よりは単なる火焚場穴と考えられた。東西セクション図を1/20で実測し，ベルトを除去した。

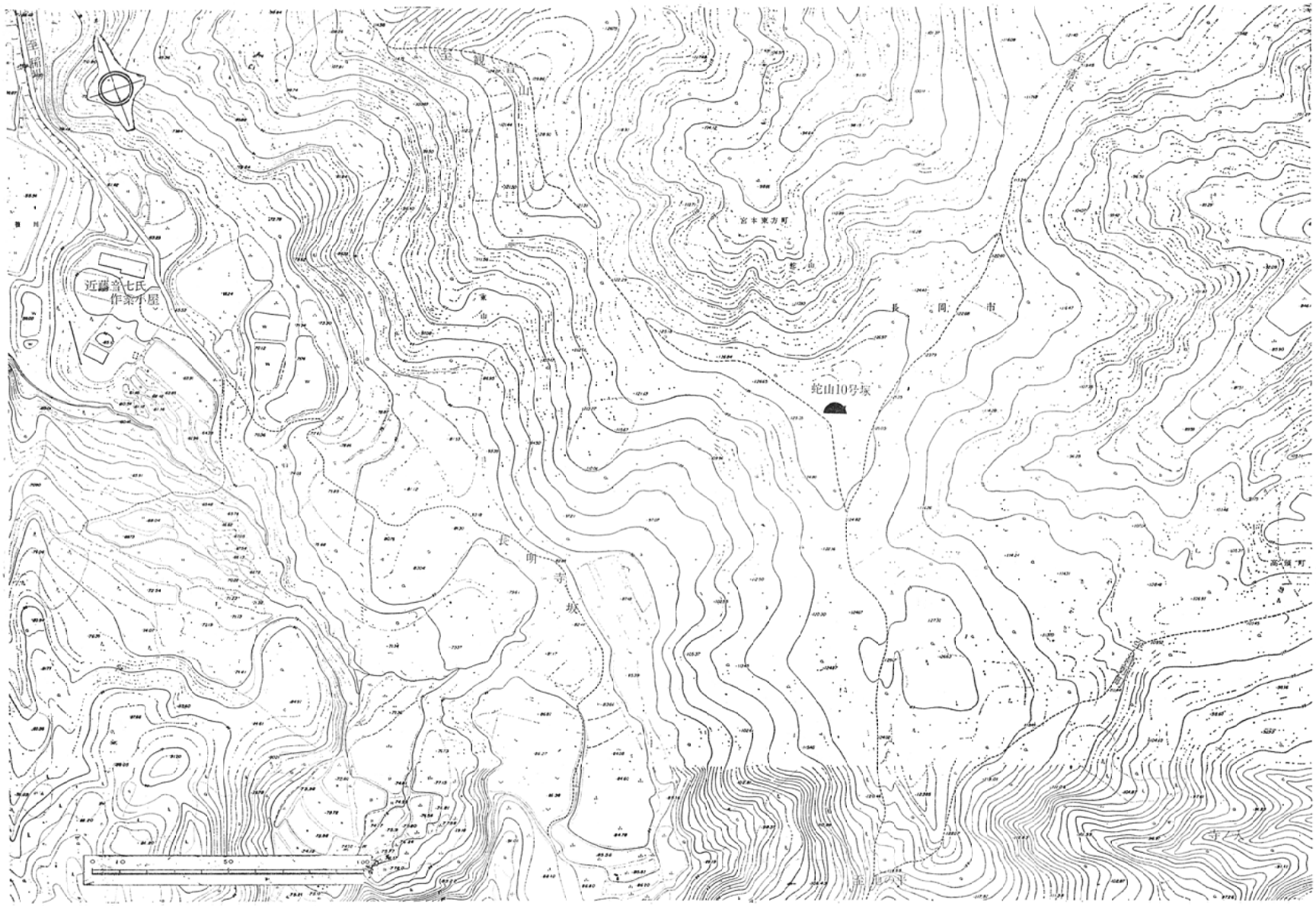
8月27日　南北セクション図作成。塚は第7層に分かれ第4層は周辺地山を消平して版築したものであり，そのため塚の造り出し基底部は約5.5m×約5.8mの方形台状にカットされていることを確認した。南北軸のベルトを除いたあと全面に清掃を行ない，作業員を入れての作業を完了する。器材を撤収，近藤音七氏作業小屋におろす。

8月28日　稲岡・家田の両名は，完掘後の塚基底部の実測と南側からの頭上写真を撮影し蛇山10号塚に係る発掘調査を完了し，器材・用具を点検し下山した。午後両名は中山1号・2号塚を手伝う。

8月29日　本日より，稲岡は中山1号塚・2号塚発掘調査に加わる。

8月31日　稲岡・藤巻両名は今回の各調査地点の器材・用具の確認と引上げ作業に従事し，トラックにより撤収を完了した。

（稲岡嘉彰）



第13図　蛇山10号塚周辺地形図

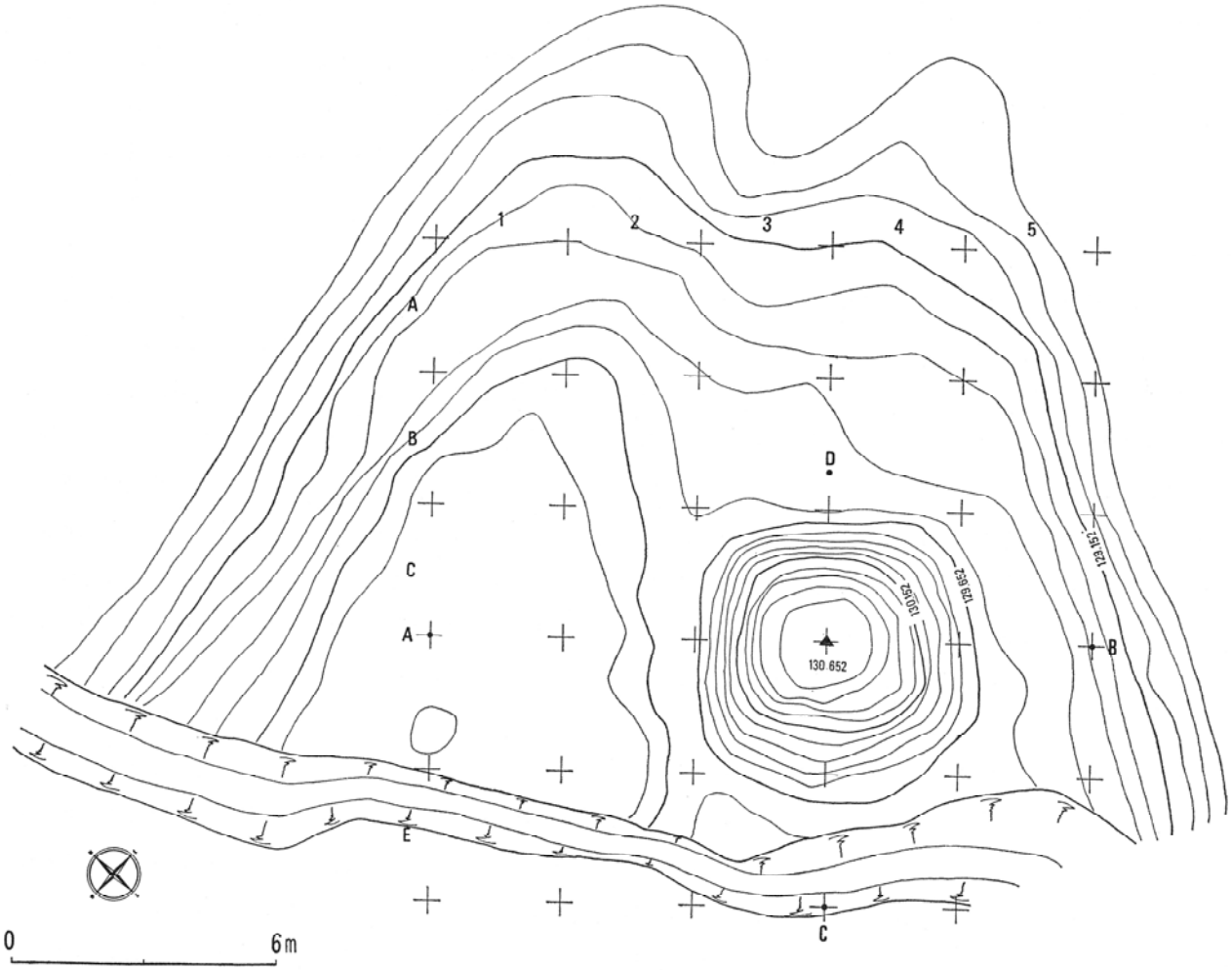
〔Ⅱ〕 蛇山10号塚の位置と現状

長岡市は新潟県のほぼ中央に位置し，市域中央部を信濃川が北流し東部地域は比較的急峻な東山連峰に，西部地域は比較的ゆるやかな西山連峰に囲まれており，これらの山裾には洪積世の河岸段丘が発達している。今回の発掘対象地区は長岡ニュータウンの中央第１・第２地区の中央西住区地域に含まれている。この中央地区は西山連峰，八石丘陵の末端にあたり，その標高は約50～230*m*である。丘陵北部には笹川，谷川，河久保川をはじめ黒川に合流する多くの小河川が存在し，小谷沢，ヨ外ケ入，杉の高地の沢，大谷沢，笹郷と笹川の谷など小谷を形成している(第１図)。

蛇山10号塚は八石丘陵の北側末端近く，宮本東方町蛇山3006―２番地に所在する。丘陵南端の通称大山または鏡山（標高212*m*）付近で分岐した丘陵は片刈城跡をへて蛇山地区へぬけるが，塚と城跡は直線約2.6*km*を計る。

第13図に図示した様に池の平から続く尾根道は東の高頭に分岐し，さらに一方は蛇山10号塚の東側を得て赤坂から観音山へ至る。塚の西側尾根道も観音山へと続くが現在人跡もなく通交不能である。本塚はこの両尾根道の分岐する追分けに当り，標高130*m*の頂部に立地する。旧笹川郷の直上であり，尾根道の西側は笹川の沢と急峻な長明寺坂の崖線により立ち切られている。

本塚の初見は新潟県埋蔵文化財調査報告書第10（1977）長岡ニュータウン遺跡分布調査報告書」〔１〕で形態は方形



第14図　蛇山10号塚平面実測図

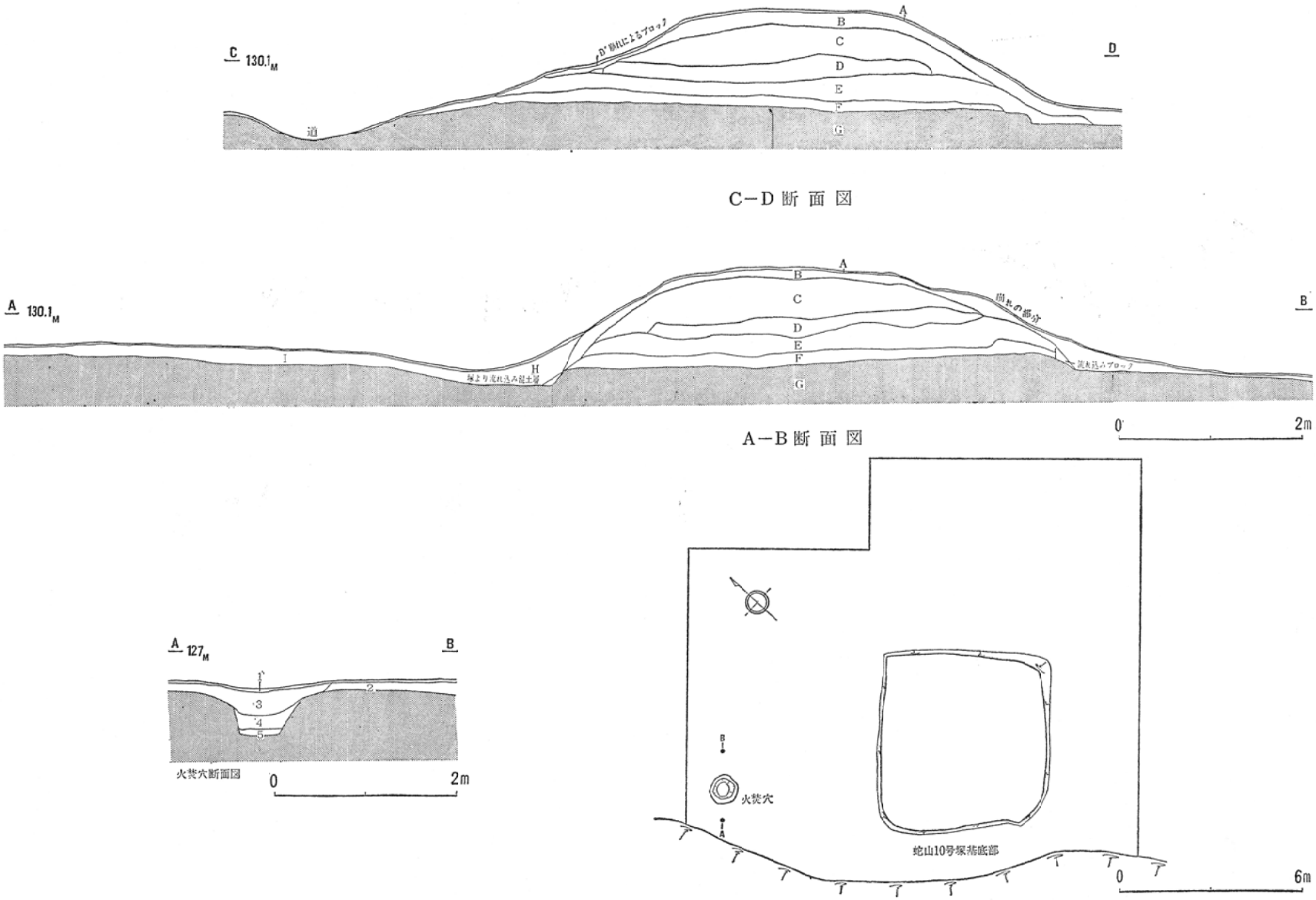
で，底辺5.5m，頂辺1.5m，高さ1.1mであり付近に石造物・周溝は認められないと報告されたが，伝説，伝承等は全くなかった。なお，調査者石沢寅二は「温古の栞」の片刈城跡についての記載の中にある「カタガリ山中に其遺骸を埋しと云る一基の塚あり」の一文を参考として紹介している。周辺の地目は雑木山林である。

塚は第14図でその外観を図示したがその規模は基底部で東西軸6.15m，南北軸6.35mを測り，塚上部で東西軸1.9m，南北軸2.1mの平坦面をもち，塚の高さは1.1mを測る。断面が台形状（第15図）をなす方形土壇状の平面形態を呈する。この蛇山10号塚の追分け部分，塚を中心として扇状に広く約130m^2の平坦部を有する。塚の北東側平坦地がやや緩やかな傾斜をもってD—2グリッドの塚裾にわずかに凹み状を呈するが，周溝状を呈するものではない。塚の構築時の削平による根跡をとどめたものと考えられた。この塚に対する外部施設は確認されないが，D—1グリッド北東道路に面して直径約1.2m，基底部径約45cm，深さ約50cmのピット状遺構が地表面から凹み状に観察されたが，いわゆる炭焼穴窯（伏焼法）というよりも火焚場としての穴と推定された。なお発掘対象地には3×3mを基本区画として東西5グリッド，南北5グリッド，総計25グリッドを設定し，東から西へアルファベットを，北から南へは数字を付し，これをA—1，B—2のように記号の組合わせをもってグリッドの名称とした。（稲岡嘉彰）

〔Ⅲ〕 内部構造（土層）

蛇山10号塚の土層断面図は塚の中央をA～B，C～Dに切ったもので第15図，図版第7図に示す通りである。現状は楢・櫨の疎林であったため，塚丘の一部に自然の崩れがみられた以外は保存状態は良好で構築時の様相を偲ばせている。基本的な層序及び土層の状態は次の通りである。第1層は腐葉土層(A)で乾性の表土層である。第2層(B)と第3層は本質的には褐色土層で同一であるが2層と3層の切れ目には塚平坦頂部から塚肩部にかけて小円礫がまばらに含まれているが，明らかに葺石ではない。第3層(C)は第4・5・6層の混合土層で炭の粉末を微量含み，地山のブロックも混入する。第4層(D)は第7層の地山と同一であり赤褐色の粘性土層の版築による盛土による封土である。第5層(E)は黄褐土層と褐色土層の混土層である。旧表土層を盛土した封土と考えられる。第6層(F)は褐色土層で微量の細かい炭化物を含んでいる。塚構築時における旧表土層と考えられる。第7層は地山層である。粘性を帯び乾燥するとかたく，ヒビ割れを生じ易すい。また塚の南側肩部には明らかに崩れ，現表土との境いは明瞭にしがたい。塚の北側(H)は塚頂部及び傾斜面からの流れ込みによる混土層でやや暗褐色を呈している。(I)は(H)との切れ目が不鮮明であるが，黄褐色粘性土でうすくよごれている。塚の構築時の削平により一時空気にさらされた地表面と考えられる。塚の断面東側の傾斜部分も第2層が流れ込んでいる。以上のことから第1層から第5層までが版築による盛土で他は自然推積と考えられる。特に第4層は地山と同一土層であり，第7層の地山は約10～20cmの深さまで削平され，その基底部南北は5.5m，東西5.85mの方形土壇状を呈する。その基底部の対角線は南北線を示し，その磁北は小木ノ城方向に当る。また第6層の旧表土も塚裾で切られ周辺部には伸びていない。第3層，第5層の混土層の推積状況からみて，本塚は周辺を削平して版築盛土により構築されていることが明瞭である。従って塚周辺の平坦部は塚の造出しに関係するものであると考えられる。

第15図・図版第8図は火焚穴である。形状は前述したとおりであるが，第1層は腐葉土，第2層は赤褐色土で地山漸移層，第3層は褐色土で若干の炭が混入し，レンズ状の堆積をする。第4層は火に焼けて茶褐色を呈し若干の炭化物を含む地山層である。第5層は炭と灰の層である。ピットの外表面には炭化物は散乱しない。基底部には約8cmの厚さで灰と炭が堆積し，深さも約50cmと浅い。いわゆる伏焼法による穴窯と考えるよりは穴を掘って焚火をしたものと考えたい。地表面から凹み状に観察されることから，極わめて近年のものであり山作業等に関連するものであり蛇山10号塚の構築及び塚に付帯するなんらかの施設とは考えられないものである。（稲岡嘉彰）



第15図　蛇山10号塚断面図・火焚穴断面図・塚基底部実測図

〔Ⅳ〕 調査の結果とまとめ

蛇山10号塚の発掘調査で留意したことは本塚の追分けの北東及び南東部に塚を頂点として扇状に広がる平坦部と塚との関係である。この平坦部について金子拓男は新潟県埋蔵文化財報告書第10「長岡ニュータウン遺跡分布調査報告」の中で「従来塚の周辺に平坦な地域を備えている例は報告されていない。しかし塚の調査は，塚そのものを対象としその周辺部に配慮してこなかったことも事実であり，塚周辺部の調査は今後の課題としなければならない。塚の盛土の採集地・塚に伴う祭礼行事・塚に伴う施設等について究明する必要がある」と指摘している。当発掘調査では塚本体を含めて周辺部も広く全べて発掘することを原則とした。本調査で知り得たことは下記の如くである。

① 蛇山10号塚の平面形態は方形土壇状をなし，断面は台形状を呈する。

② 塚の封土は地山である赤褐色粘性土の上部に旧表土が堆積し，地山を約10～20cm切り込み方形土壇状に削平し旧表土は塚の周辺に存在しないこと，第4層は地山のみの盛土であり，第1層～5層までが版築と認められた。

③ 塚本体は旧表土から地山に台形に削平し，塚の基壇を造り出し，平坦地は明らかに塚の盛土採集の結果によるものと認められた。平坦地には柱穴等の遺構は発見されず，ごく近年と考えられる火焚穴のみであった。

④ 塚の内部施設・周溝・柵列等の塚と外部空間と区切る外部施設の存在は確認されなかった。

⑤ 遺物は全く検出されなかった。

⑥ 塚は一基単独の性格を有し，旧尾根道間道の追分け点に立地する。北東・南東面は視界が開かれ集落を見下ろす位置にある。

以上の点から，本塚の造営目的についてそれを資る資料や年代を表わすものは得られなかった。また石沢寅二が参考に引用した「温古の栞」記載の首塚に当らぬことは調査の通りである。金子拓男の指摘した塚周辺部の平坦部の問題は中山5号塚で最初に実施されているがその実態をうらづける資料は得られていない（駒形敏朗・寺崎裕助1978）。本塚においては祭礼行事の究明は出来なかったが，平坦地が盛土採集地であったことは認められる。かつて金子は方形プランで断面が台形をなす形態の塚をA型～E型の5タイプに分類し密教の修法壇，風大塚，修験者の墓廟又は墓所，真言葬法による火葬等の性格を有する塚（金子拓男1974）とし，特に真言密教の「六大体説」と塚の形態の関係を追求し封土の「顕在性」を指摘している。本塚の例も内部施設をもたず，封土が版築法であるなど修法壇に近似する特徴がうかがえるが，本塚が尾根道の分岐する追分け上に立地するので道路の標示や交通に伴なう信仰形態を具象化したものとも理解される。また寺崎は中世社会における山城・塚・集落という一つの生活領域の形成に着目している（寺崎裕助1978）。本塚周辺に寺ノ入，地獄谷，寺屋敷，長明寺坂，大菩薩等の宗教的地名が多いのも，今後の課題となろう。ここでは，塚本来の造営の目的や造営の当初にはある一定の信仰・宗教的教義等を具現化するための法則＝儀軌に基づく論理的背景が当然あったと考えられることを提起したい。それが拡大・波及受容される中に儀軌の法則によらぬ土俗信仰に基づく塚の造営＝塚を構築する目的の多様化が生まれたと推定されるのである。従って現状における本塚建立目的の究明も今後の調査資料の増加をまって解明してゆかねばならないと考える。（稲岡嘉彰）

〔参考引用文献〕

石沢寅二・金子拓男他（1977）「蛇山10号塚」「中山5号塚」長岡ニュータウン遺跡分布調査報告〔1〕新潟県教育委員会

金子拓男・戸根与八郎（1974）「川治百塚第6号塚」北越北線埋蔵文化財報告書　新潟県教育委員会

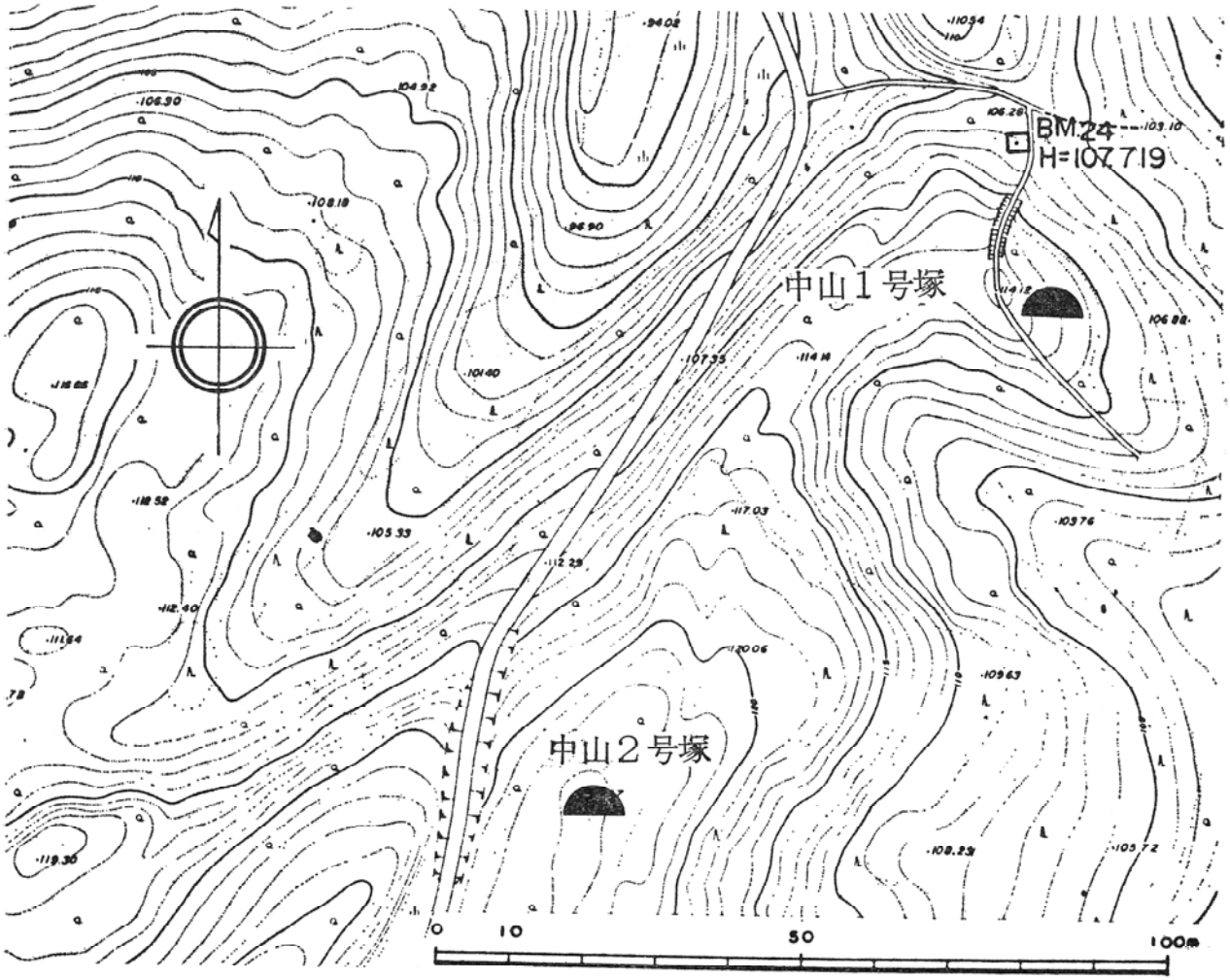
駒形敏朗・寺崎　裕助（1978）「中山5号塚・座禅塚」長岡ニュータウン遺跡発掘調査報告書　長岡市教育委員会

中山1・2号塚発掘調査報告書

〔Ⅰ〕 中山１号・２号塚の位置と現状

柏崎市より曽地峠を越えると国道８号線は北流する黒川の形成する沖積地内を走る。黒川右岸の中村公民館前より滝坂の切通しを経て東方丘陵に登れば，陵線上には来迎寺に抜けると聞く林道がある。人々の利用がとだえた現在は雑木に埋もれているが，もとは形のよい林道であったという。林道は丁度滝坂の切通しで三つに分かれ，一は陵線を下って稲場に至り，二は丘陵西側斜面を下って笹郷に至り，三は滝坂の切割から中村に至る。この三本の山道の分岐する地点は通称四十刈分と呼ばれ，狭いが略平坦地となっており，中山１号塚はこの平坦部分に独立して存在する。西方に広場をもつ１号塚は林道の東側に隣接しており，広場の面積約150㎡・塚径約6.0m・高さ約1.2mを測る。塚の北方は切割であり，また東北方は杉の植林地として削平されており，東方は大林沢に落ちる斜面である。現状は雑木林であり，伐採まで塚の形状は判断し難かった。若干コンターに乱れがあるが，盗掘などを受けた様子はない。中山２号塚は，１号塚より緩い陵上林道を登ること約50m，林道西側に隣接する見晴らしの良い平坦地に存在する。丸山城跡に近接するこの平坦地からは眼下に中村を，また黒川を挟んで西方に小木ノ城跡を明らかに望む。塚本体は径約6.0m，高さ約1.0mを測る。北方は約120㎡のきれいな広場であり，３号・４号塚に続く尾根線南方には三ケ月形の凹部が認められた。東方は林道をまたいで杉の植林地，西方はすぐに中村に落ちる斜面となっている。現状は雑木林であり，やはり伐採まで形状が明らかでなかった。

（藤巻正信）



第16図　中山１・２号塚位置図

〔Ⅱ〕発掘調査の経過

8月7日～8月12日　中山1・2号塚は共に現状が雑木林であった。このため伐採・草刈りをして調査の準備を行なう。1・2号塚とも伐採完了まではどこが塚なのかわからなかった。

8月16日　1・2号塚のコンター測量を行なった。1号塚は略方形に近いが円錐台形であり，2号塚は張胴方錐台形であると知られた。また1号塚は西方に，2号塚は北東方に広場をもつことが判明した。

8月17日　発掘の開始に先立ち，現地にてお祓いを行なう予定であったが，あいにくの雨となりこれを中止した。代替に宮本村の大日寺においてお祓いを受け，お礼をいただいた。

8月18日　豪雨にて作業不可，中止した。

8月19日　かねて中村公民館に送っておいた発掘器材の山あげを行なう。山道は細く・長く・傾斜もきつい。午前半日を費した。午後から2号塚の表土剝ぎを開始する。木根多く手間取りそうだと思われる。

8月20日　表土剝ぎを継続する。一部完了部分について写真撮影及び図面の作成を行なった。

8月21日　表土剝ぎを完了して写真撮影及び図面作成を行なう。その後，盛土除去作業にとりかかる。本塚は地山を台状に整形した後に盛土したものかと知られる。

8月22日　盛土除去作業を継続する。地山整形は塚本体の基部のみでなく，北東方の広場にも行なわれているとみられる。小林達雄・寺崎裕助の二氏来跡。

8月23日　盛土除去作業の大半を終わり，短軸の土層図作成及び写真撮影を行なう。SP・D付近で旧地形の深くえぐれた状態が認められる。この部分では盛土して他の平坦部分と同等のレベルを得ていたと考えられる。

8月24日　午前中降雨激しく作業を中止す。午後には晴れたので作業を開始・短軸セクションベルトを除去した。他に，1号・2号塚の遠影写真の撮影を行った。

8月25日　長軸の土層図作成及び写真撮影を行なった。その後，セクションベルトを除去して本塚の調査を終了した。本塚は地山整形痕以外には，その内・外に遺構を認めない。また遺物も検出されなかった。

8月26日　1号塚の表土剝ぎを開始した。塚西部の広場はやや鞍状を呈するが，地山整形によるものか，2号塚との比較においても興味ある点である。

8月27日　表土剝ぎを完了し，写真撮影・図面作成を行なう。その後，盛土の除去作業にとりかかる。塚頂部では約－50cmで灰白色土にあたる。地山のようだがパサパサと締りがない。断面で確認することとした。

8月28日　盛土除去作業を継続する。盛土は薄く，地ブクレ様の地山を整形した基部が本体の大部分を占めることが知られた。従って広場も若干の削平を受けていると認められる。

8月29日　盛土の除去を完了し，写真撮影及び土層図の作成を行なった。その後，セクションベルトの除去に取りかかる。他に広場部分にトレンチを設けたが地山の整形痕を認めるに至らなかった。

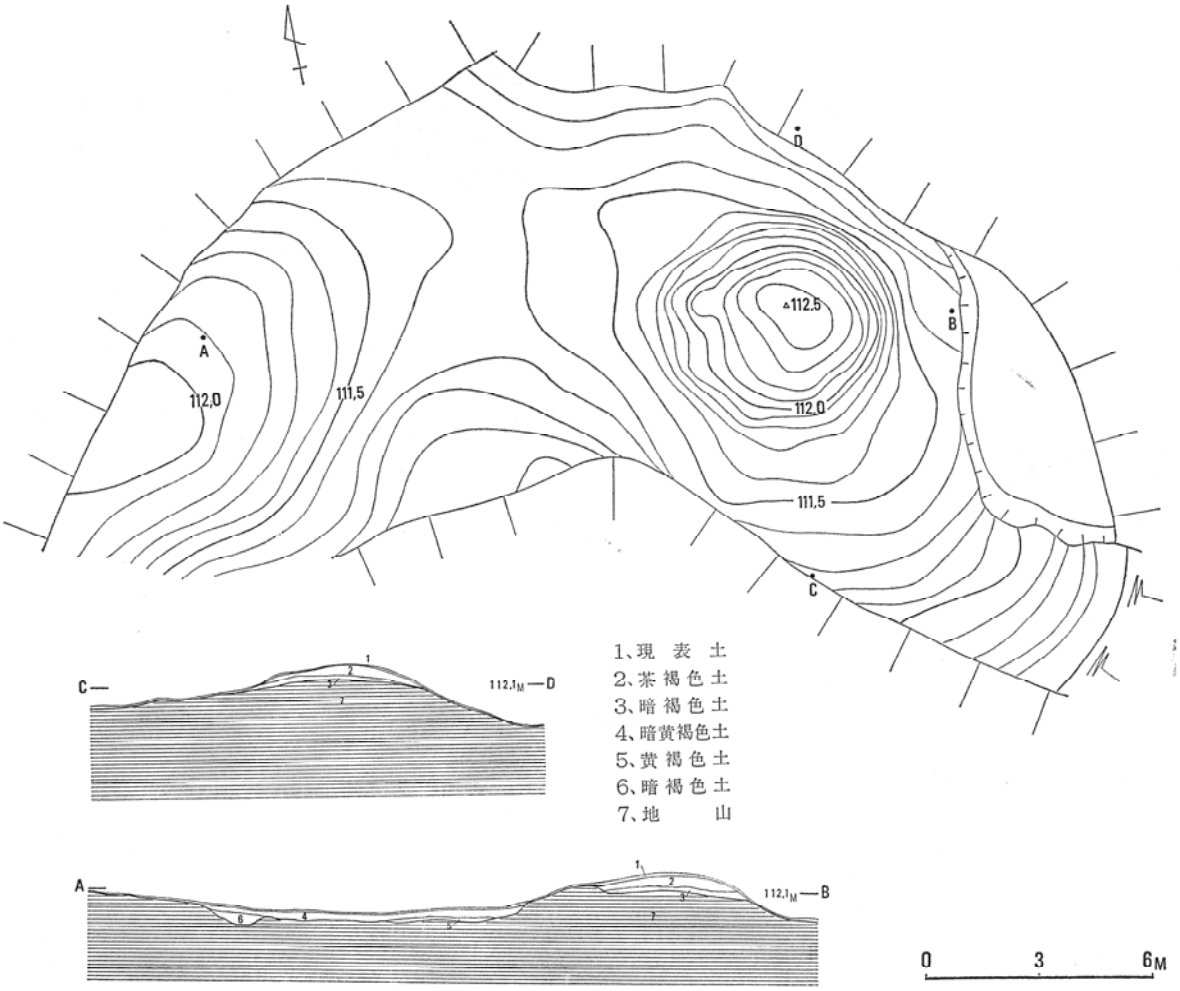
8月30日　セクションベルトの除去を完了して本塚の調査を終了した。午後には器材を整理・確認し，下山して中村公民館に収納した。作業賃金を支払った後，公民館にて作業員慰労会を行なう。

8月31日　器材運搬，総撤収をもって全日程を終了した。　（藤巻正信）

〔Ⅲ〕 中山1号塚の調査

塚本体の西方に平坦部をもつ本塚は，マウンドの一部が崩れたようになっており，為に略方形と見誤まるが，コンター測量によれば，長径約7.0m・短径約6.0m・高さ約1.2mの略円錐台形を呈することが知られた。尾根筋及び平坦部の位置から，主軸方位はN—80°—Wとされよう。本体頂部の盛土は一層のみで，層序は第1層・現表土，第2層・茶褐色土，第3層・暗褐色土，第7層・地山である。なお，土層図中第4・5・6層は笹郷方面より入る大林沢頂部の侵食によるものである。第3層は旧表土であると解され，本塚の盛土は第2層のみであると知られた。また，このことから本塚の形成にはかなりの地山整形が行なわれたと推測される。即ち第3層・第4層のあり方によって，本体西方の平坦部は旧地形を整形することによって設けられていると判断される。土層図A—B（第17図）によれば塚本体は第3・第4及び第7層の断面のあり方から，従前の地ブクレを利用してこれを整形したものであり，また平坦部及び周辺は同時に地山を削除することによって構成されたものであると知られる。このため本塚は盛土一層のみ（厚さ約20cm）でありながら約1.2mの高さを得ていたのである。他の施設及び遺物は発見されなかった。

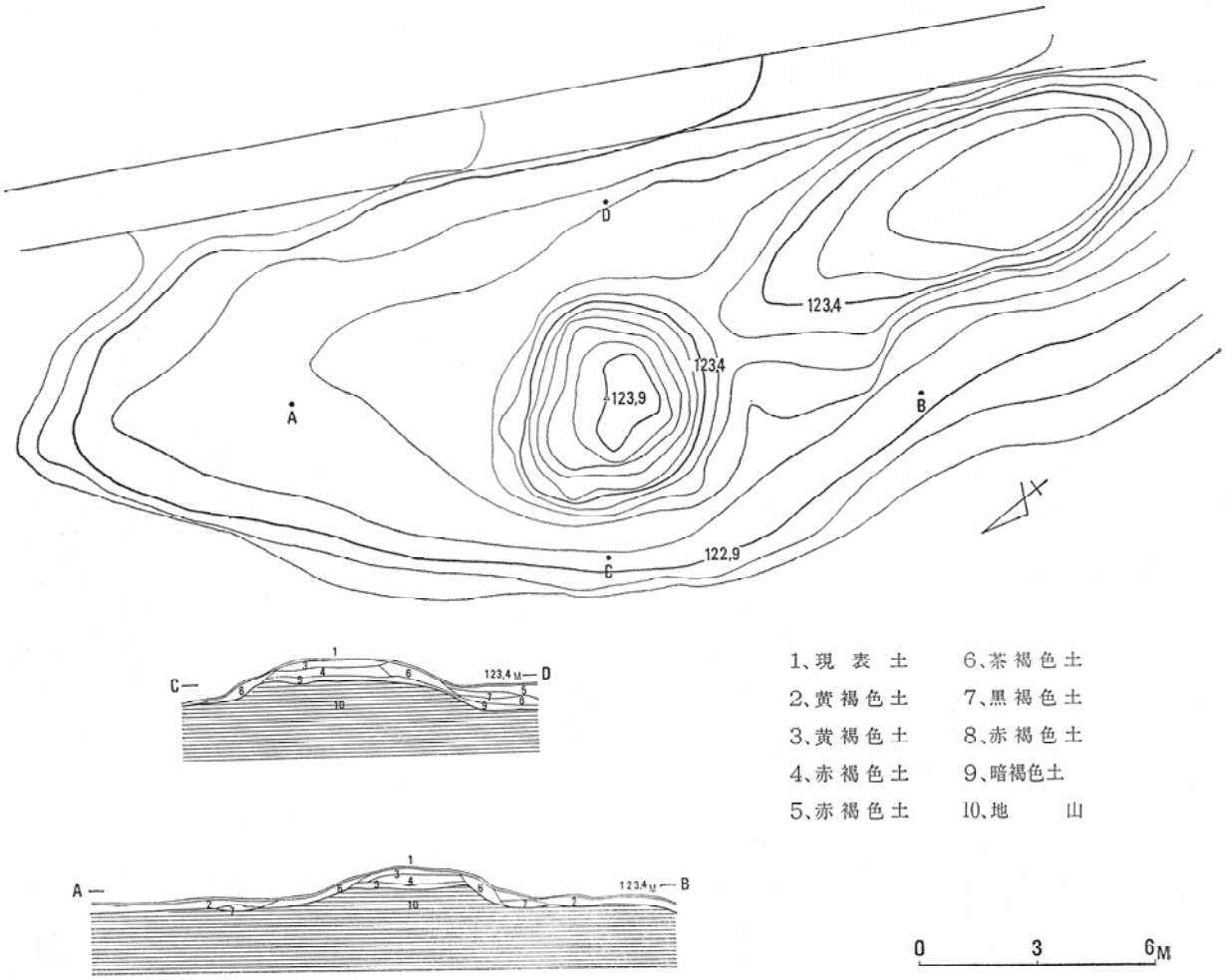
（藤巻正信）



第17図　中山1号塚平面図・断面図

〔Ⅳ〕 中山2号塚の調査

マウンドはやや流れた状態にあったが一辺約6.0mの張胴方錐台形であったことが測量によって明らかとなった。主軸方位はN—38°—Eとされよう。塚本体の北東方はきれいな平坦地であり，南方には三ケ月形のやや凹んだケ所が認められた。本体頂部の盛土は二層あり，層序は第1層・現表土，第3層・黄褐色土，第4層・赤褐色土，第9層・暗褐色土（旧表土），第10層・地山である。土層図A—B（第18図）によって，本塚は地山を削って塚基部を造り出し，基部上に若干の盛土をしたものであることが知られた。また，現状で認められた三ケ月形の凹部は周溝ではなく，単なる地山整形時の整形痕であることが知られた。林道側SP・D付近では第5層・赤褐色土，第7層・黒褐色土，第8層・赤褐色土層，第9層・暗褐色土が認められ，第9層は第4層に連続する旧表土であると解された。しかし，第5層～第8層については直接に塚本体の構築に関係するものではなく，むしろ平坦部の構成に関係があると思われる。つまり，傾斜する第9層・旧表土上に盛土することによって狭い平坦部を増設し，塚のバランスを整えていると考えられる。本中山2号塚は地山を整形することによって本体基部を造り出し，同時に平坦部を構成し，一部盛土によって平坦部を整えていたのである。その他の施設及び遺物は発見されなかった。　（藤巻正信）



第18図　中山2号塚平面図・断面図

〔V〕 中山1号塚・2号塚のまとめ

1. 中山1号塚・同2号塚の構造について

今般の発掘調査によって知りえた事項は，下記の如くである。

① 1号塚の平面形態は円形と推定され，2号塚のそれは方形を呈していた。

② 1号塚にあっては，地山であるシルト層上部に，旧表土と考えられる黒褐色土が堆積しており，その上部に赤褐色土が盛られていた。赤褐色盛土層上の茶褐色を呈する盛土は，本来赤褐色であったものが自然作用によって変色した同質土層であり，盛土は本来一層であったと考えられた。

③ 2号塚にあっては，シルト層と黒褐色土層間に，シルト層の上部地山である赤褐色土の堆積が認められた。盛土については，1号塚と同様であった。

④ 1号塚・2号塚はともに，地山よりの削り出しによって，その基部を形成していた。

⑤ 1号塚・2号塚にはともに，内部施設は認められず，また周溝・柵列等の塚と外部空域を隔てる施設の存在は確認されなかった。

⑥ 1号塚・2号塚にはともに，裾部に広場状の平坦地の築成が認められた。しかし，施設の存在は，確認されなかった。

⑦ 遺物は，全く検出されなかった。

二基の塚が盛土遺構であることは，盛土の存在から明白であるが，その盛土下の基部について着目してみたい。二基はともに，尾根の一部からの削り出しにより，その基部を形成しているのであるが，とくに1号塚にあっては，シルト層上の上部地山である赤褐色土層が欠落しており，黒褐色土堆積以前の極めて古い時期に，赤褐色土が流出したものと考えられる。このことは，この尾根上にあってもこの地が特異な地であったことを示すものであり，塚築造以前より，多少の高まりをもっていたことをも示している。すなわち塚築造にかかわる選地に際し，微かながらも高まりのある当所を選定する志向があったものと考えられるのである。

二基のそれぞれの裾部に認められた平坦地は，塚の付属施設であったと知られ，このことは塚の性格を考える上で興味深い。この場合，二基の平面形態の相異及び二基ともに他の明確な遺構・遺物を認め得なかった事実も併わせて検討する必要がある。

（波田野至朗）

2. 中山1号塚・同2号塚の性格について

かつて安達吉治は，中山1号塚・2号塚の伝承について，次の如く述べたことがあった。すなわち里人の言にある，同所が昭和初年まで「ソーゼンバ」と称され，馬修繕の場としての役割を果たしてき，共同作業の後に酒食を持ちより，馬の健康を祀念し，慰労の宴をもよおしたということを引き，塚に続く平坦部が作業の広場として用いられ，機械化の進む中で行事も塚の使用も終息して今日に至ったとしているのである。（安達吉治1977）安達はこれによって，暗に二基の塚が馬の供養塚であったことを述べたものと解される。しかし塚そのものは，築造以来今日に至る長い間に，機能上幾多の変遷をたどったことが考えられ，二基の塚が当初より馬の供養塚であったか否か，他の可能性についても検討する必要があろう。

発掘調査の結果，内部施設は存在せず，遺物も全く検出されなかった。また，広場状の平坦部は塚築造とほぼ同時

に形成されており，塚の当初の機能と密接なかかわりを持つものと考えねばならない。しかし，１号塚の平面形態が円形であり，２号塚のそれが方形であるとの形態の相違は，金子拓男の「〈かたち〉としての表現・造作が常に信仰・宗教の論理的背景による」差であるとの論（金子拓男1974）を引くならば，二基が全く異なる性格をもたしめられたものであることを示すものと考えられる。

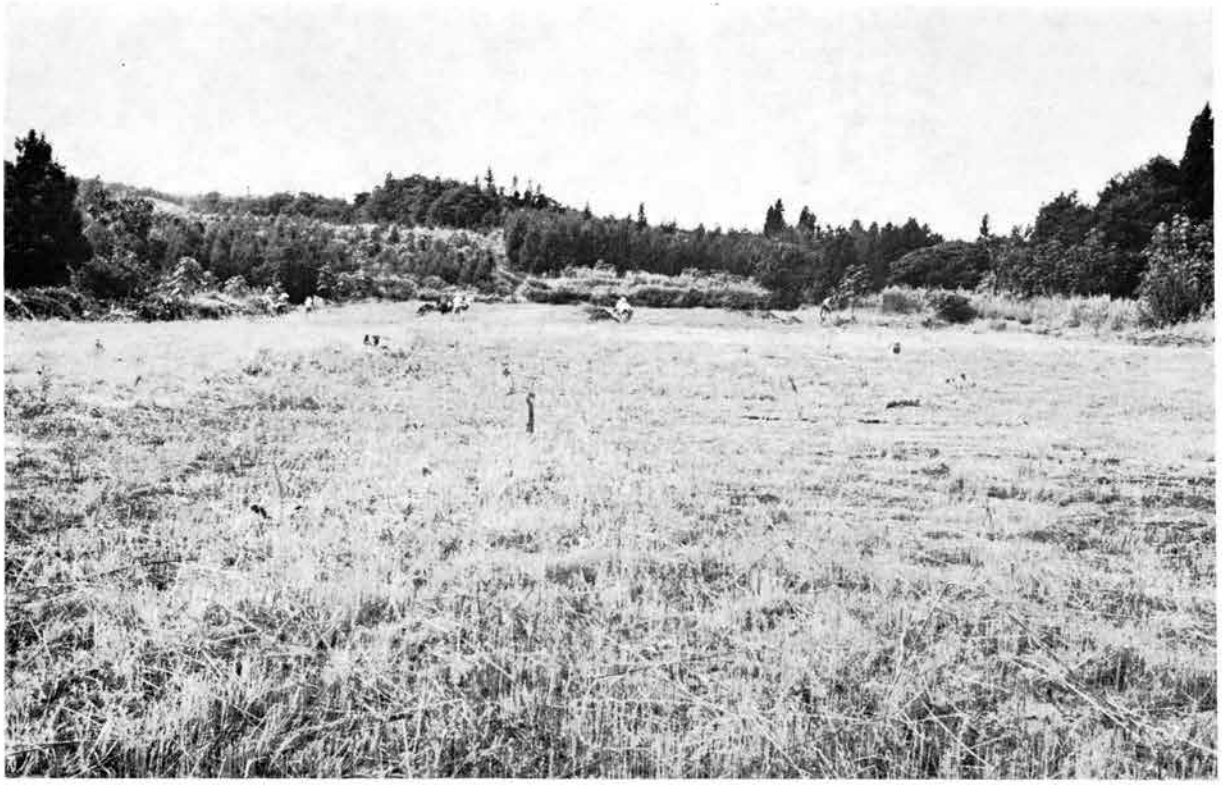
盛土遺構である塚には，「標（しるし）」としての機能の他，物を埋納する機能（埋納機能）を具備する場合と具備しない場合の二つがあり，中山１号塚・２号塚は後者に属する。施政・土地関係を背景とする一里塚・境塚も後者に属するものであるが，これらは単なる「標」であって，特に論理的背景は考えられないが，信仰・宗教にかかわる塚については，十分な背景の存在が推定でき，信仰上の対象を具現する若しくは支え奉載する機能（奉載機能）を付与せられたものとは考えられまいか。この奉載機能を具備した塚は「壇」として把握されるものであり，壇は「壇，折封土為祭処也」（『集韻』）の意であるから，「基壇に非ざる壇」も存在し，大場磐雄の指摘した修法壇（大場磐雄1967）も，この一つと考えられる。壇にかかわる祭祀は，壇上及び周辺において衆目の中で執行されたであろうことは想像に難くなく，壇のみならず塚全般について，祭礼行事及び施設究明の必要性を，すでに金子拓男が指摘している（金子拓男1977）。金子の指摘を受けた塚周辺の平坦部の発掘調査は，中山５号塚で実施されているが，その実態をうらづける資料は得られておらず（駒形敏朗・寺崎裕助1978），今般の調査でも同様であった。しかし，平坦部において遺構・遺物が確認・検出しえないことが普遍的事実であるとの速断は，当然ながらすべきではない。

結局のところ，中山１号塚・２号塚の性格については，当初より馬の供養塚であったとの確証は得られなかった。ただ，そうであったことを含む，広場をともなう「壇」であるとの可能性を指摘するのみであるが，平面形態の相違から，二基が全く同じ性格のものであったとは考えにくい。いずれにせよ，今後のこの種の塚の調査に注目し，期待するものである。

（波田野至朗）

〔参考引用文献〕

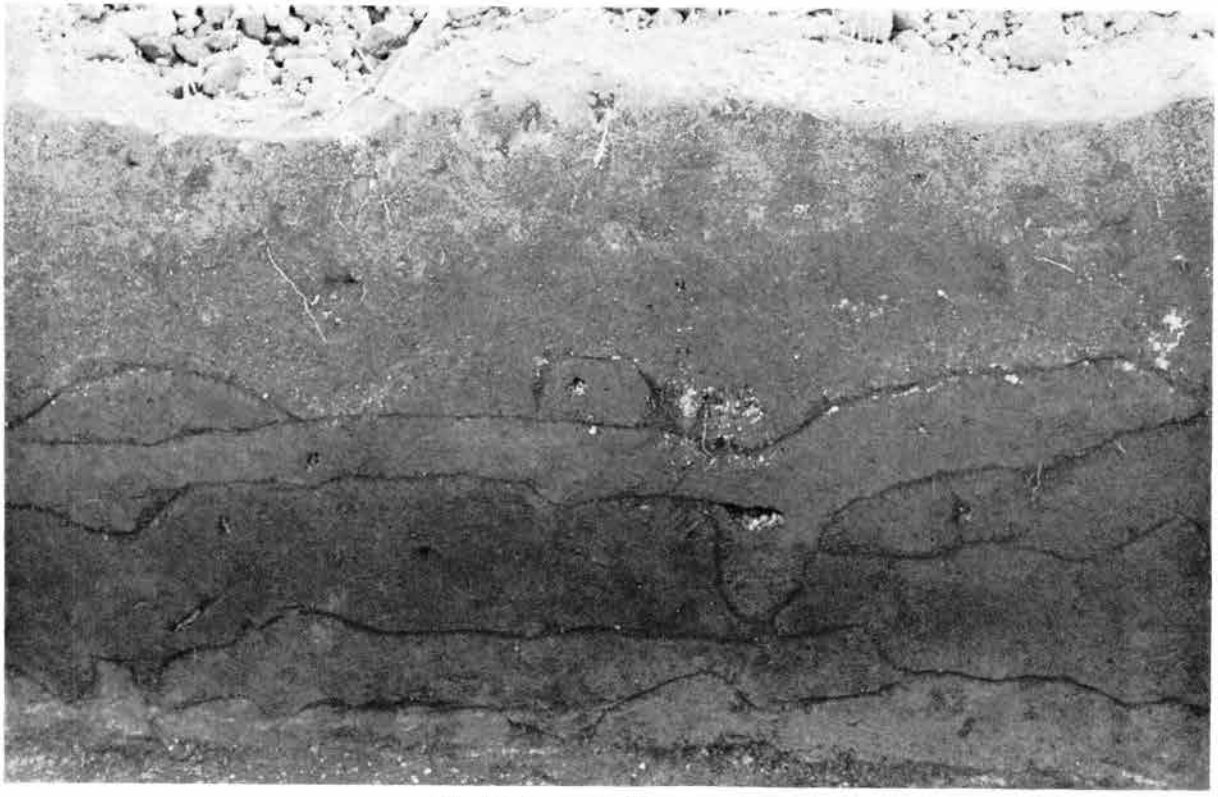
安達　吉治（1977）　「中山１号塚・２号塚」長岡ニュータウン遺跡分布調査報告書〔Ⅰ〕　新潟県教育委員会
大場　磐雄（1967）　「歴史時代における「塚」の考古学的考察」末永先生古稀記念古代学論叢　所収
金子　拓男（1974）　「川治百塚第６号塚」北越北線埋蔵文化財調査報告書　新潟県教育委員会
金子　拓男（1977）　「中山５号塚」長岡ニュータウン遺跡分布調査報告書〔Ⅰ〕　新潟県教育委員会
駒形　敏朗・寺崎裕助（1978）　「中山５号塚」長岡ニュータウン遺跡発掘調査報告書　長岡市教育委員会



遺　跡　近　景（北側から）

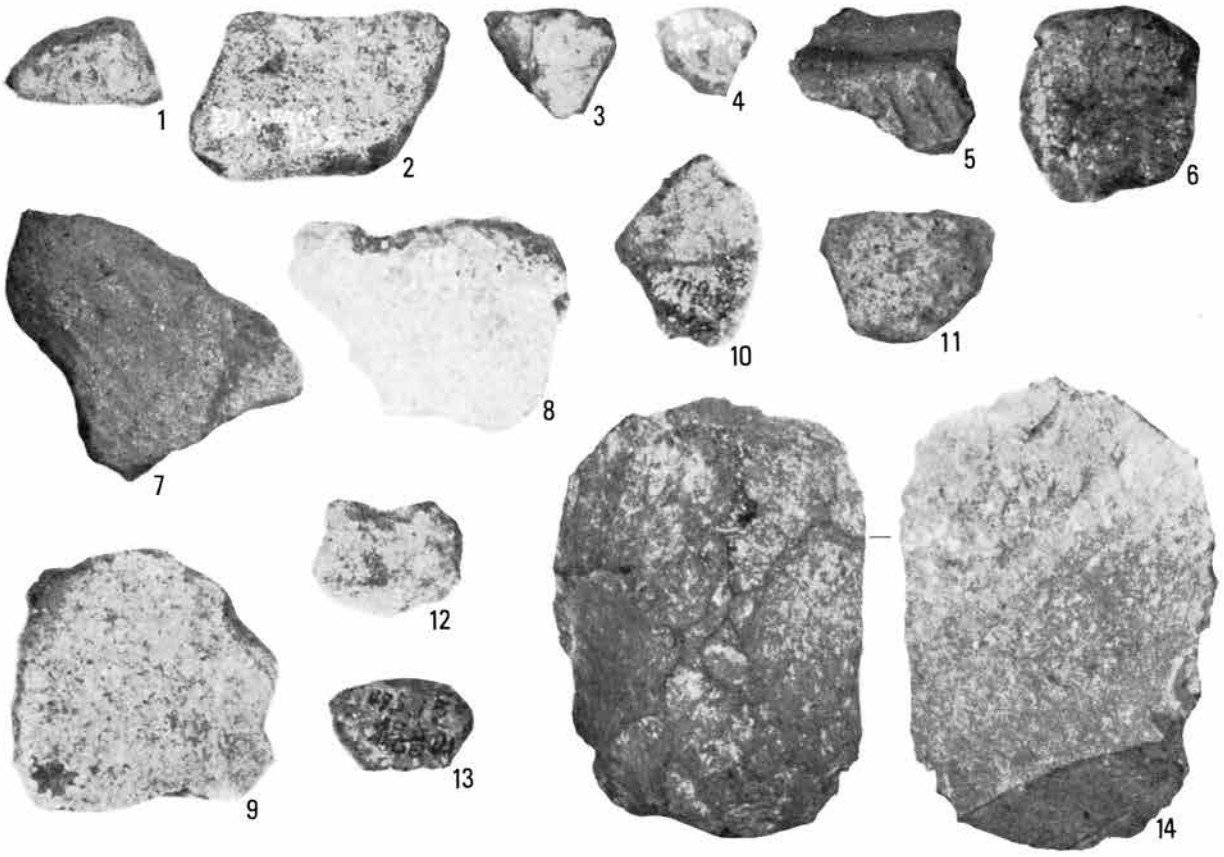
遺　跡　遠　景（南側から）

発　掘　風　景（南側から）



E—78グリッド南壁セクション

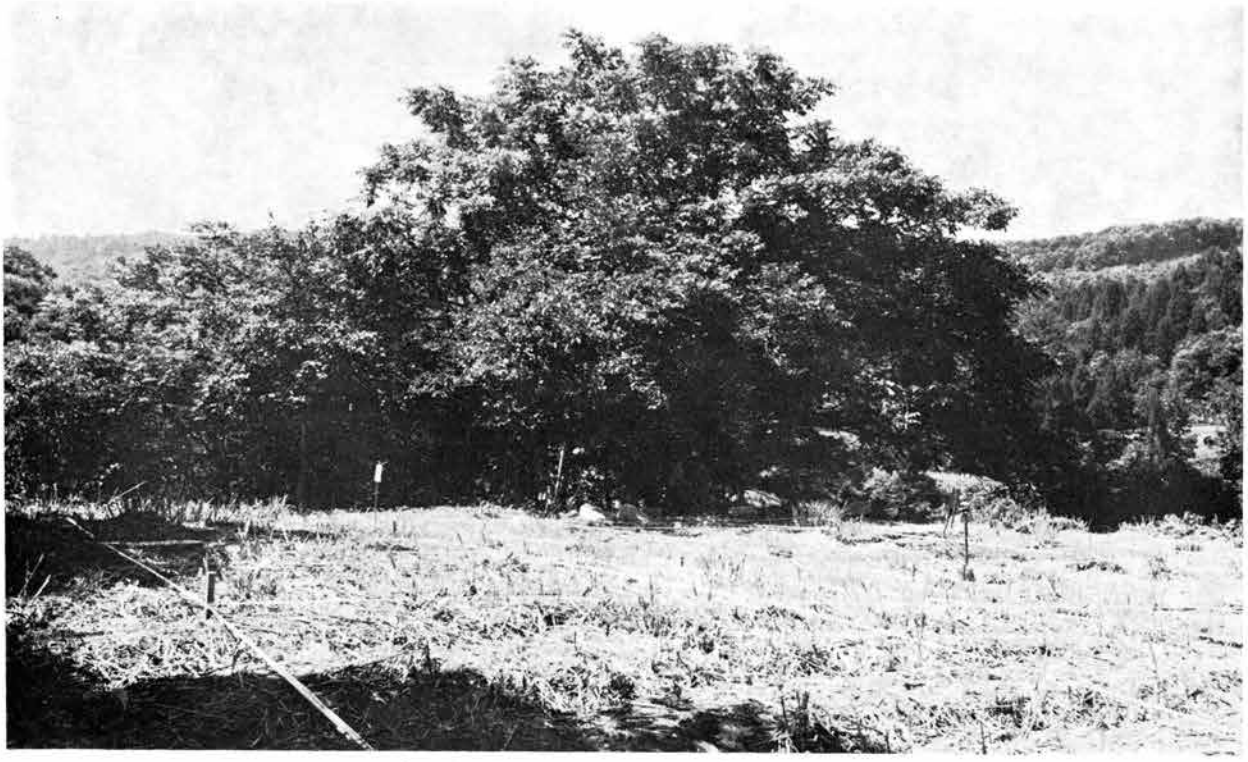
J—78グリッド南壁セクション



観音山遺跡出土遺物および表採資料 (1/1.3)

寺屋敷遺跡遠景（北側から）

寺屋敷遺跡遠景（西側から）

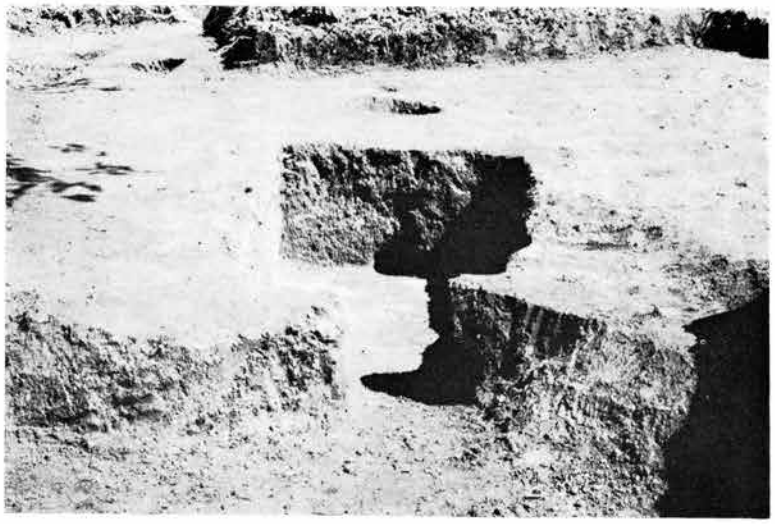


寺屋敷遺跡近景（北側から）

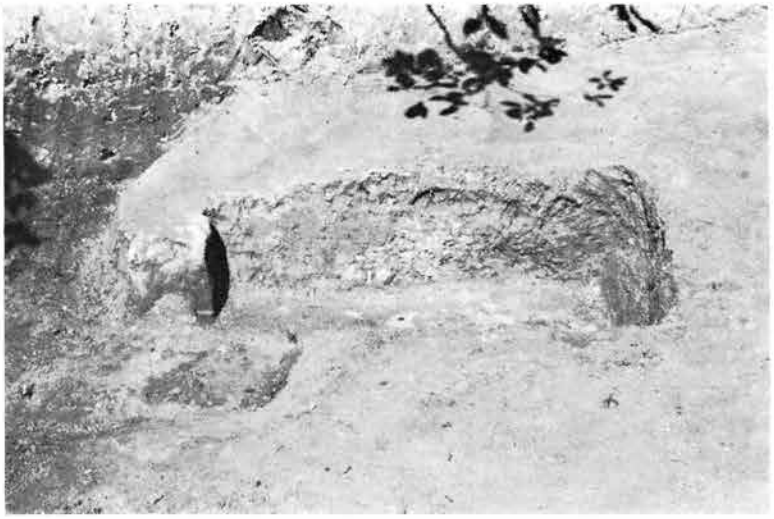
発掘風景

1 号 炭 焼 窯 跡 全 景（西側から）

1号炭焼窯内土堆積状態（北側から）



2号炭焼窯跡全景（南側から）



2号炭焼窯跡全景（東側から）

排煙口断面（東側から）

排 煙 口（南側から）

蛇山10号塚近景（東方より）

蛇山10号塚東壁断面図（A—B）

発 掘 状 況 遠 景（東側より）

蛇 山 10 号 塚 基 底 部（南側より）

中山1・2号塚位置（西方より）

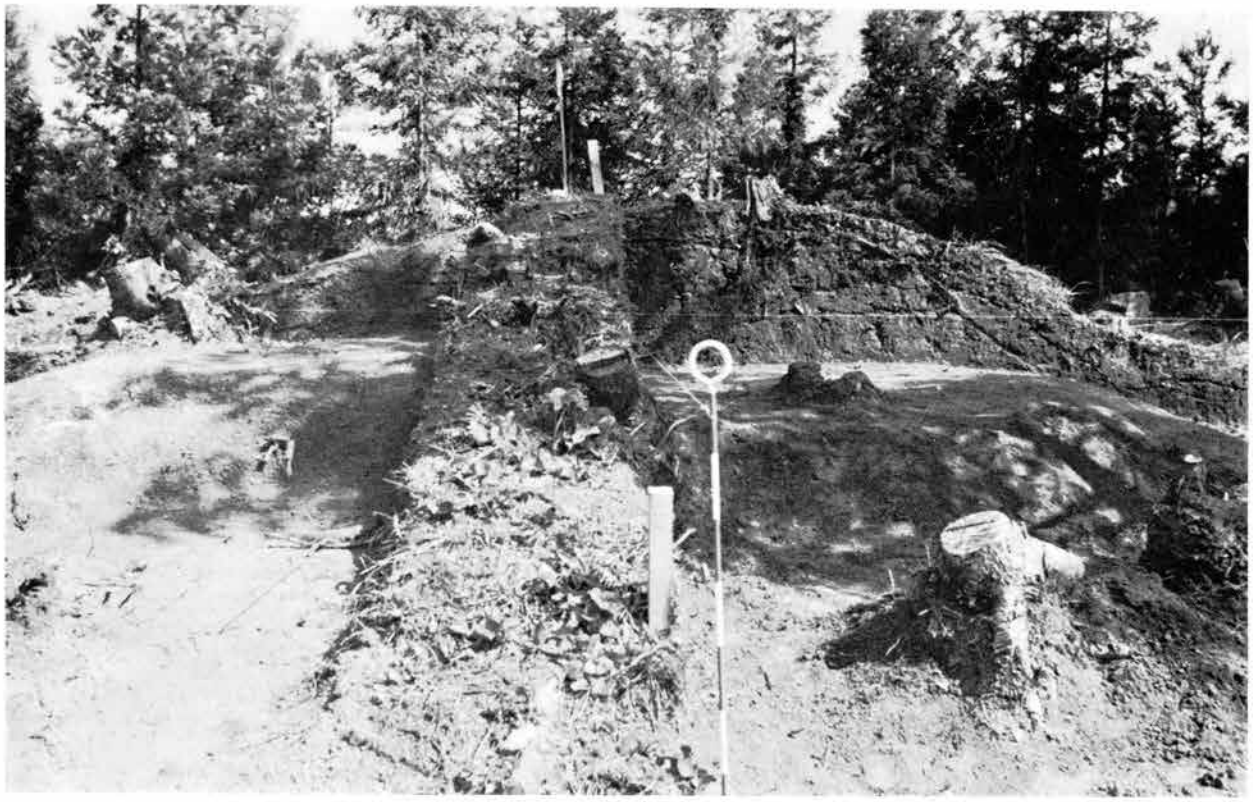
中山1号塚現状（南方より）

中山1号塚C—D土層断面

1 号 塚 土 層 断 面

中山2号塚現状（西方より）

（北方より）



中山2号塚A—B土層断面

C—D 土 層 断 面

新潟県埋蔵文化財調査報告書第18

長岡ニュータウン遺跡調査報告書

〔Ⅲ〕

—— 1979 ——

昭和54年3月20日印刷
昭和54年3月25日発行

発　行　新潟県教育委員会
印　刷　北越印刷株式会社